


安曇野市の埋蔵文化財第23集



穂高古墳群 E13 号墳(浜場塚) 1

ほ場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書

2021. 3

安曇野市教育委員会

安曇野市の埋蔵文化財第23集

穂高古墳群 E13 号墳(浜場塚) 1

ほ場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書

2021. 3

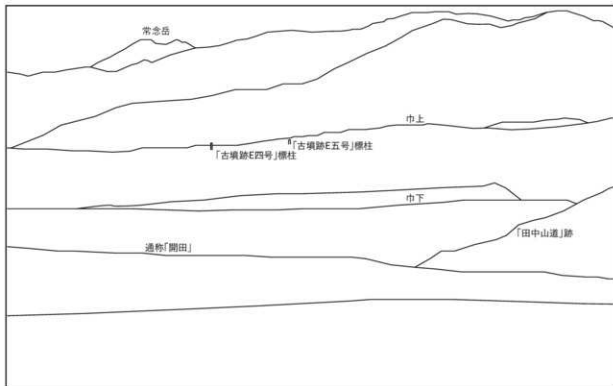
安曇野市教育委員会



表紙写真 徳高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 出土金属製品
裏表紙写真 徳高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 出土須恵器



1 早春の牧村 (撮影：田淵行男、昭和50年(1975)4月、「安曇野」所収)



本作品には、偶然にも徳高古墳群 E12・13号墳(「古墳跡E四・五号」)の標柱が写しこまれていた。段丘上は巾上、段丘下は巾下と呼ばれる。右中央の「田中山道」跡は、田中集落の人々が入会山へ往來する際に通った道である。巾下の「開田」は、戦後、烏川の氾濫原を新田開発した農地である。この作品では、古墳だけでなく現在では失われてしまった段丘崖や古道も一体的な景観として把握できる。



2 穂高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 石室 (北から)



3 穂高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 石室 (南から)



4 石室検出状況 (西から)



5 調査地遠景（東から）（令和2年（2020）5月1日撮影）



6 穂高古墳群 E13号墳（浜場塚）出土遺物

序

埋蔵文化財は、安曇野市の過去の人々の暮らしや文化、歴史を理解するためにかけがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、この埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査、成果の公開普及に努めています。

本報告書では、穂高牧地区のは場整備事業に際して、平成3年度(1991)に実施した、穂高古墳群 E13号墳(浜場塚)発掘調査の成果をまとめました。

穂高古墳群は、安曇野市穂高有明・牧地区とその周辺に所在する6世紀から8世紀にかけて築造された古墳群で、飛騨山脈東麓の烏川や中房川と複数の沢によって形成された扇状地の扇頂部に位置し、80余基の円墳が沢筋に群をなして分布しています。この古墳群は、学術誌において明治時代から注目されており、大正時代には、長野県史蹟名勝天然記念物としての報告がなされた県下でも有数の古墳時代後期群集墳のひとつです。また、全国的にも類例の少ない金銅製鳳凰型飾板が副葬されるなど、貴重な資料も出土しています。

本書掲載の発掘調査は、これまで不明確であった石室の構築方法、構造、稼働時期、遺物出土状況等に多くの示唆を与えるものとなりました。残念ながら盗掘坑や後世の耕作により、横穴式石室の天井石、側壁など一部は失われていましたが、全長8.6mの川原石を積み上げた石室が検出され、馬具、直刀、鉄鍬、須恵器がまとめて出土しました。

今後も開発等によって古墳そのものが消滅するような事態を防ぎ、貴重な埋蔵文化財が適正に保護されていくことを願っています。

末筆となりましたが、この調査は、地元関係者の方々の理解あるご協力を得て行われ、諸機関にご支援とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。本書掲載の調査成果が多くの市民の皆様にご利用され、豊かな文化都市として、後世にも繋がっていくことを祈念し、序といたします。

令和3年(2021)3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例言

- 1 本書は、長野県安曇野市に所在する、穂高古墳群 E13号墳（浜場塚）第1次発掘調査の報告書である。なお、「浜場塚」は穂高牧の字「浜場」に所在するため「浜場塚」と呼称されてきた。ただし、字「浜場」は、地元では「はあば」と発音しており、「はば（巾）」（段丘等の段差を意味する。）の転訛の可能性があること御教示を頂いた。
- 2 本書掲載の調査は、ほ場整備事業に際し平成3年（1991）に穂高町教育委員会が実施し、事業者及び穂高町が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は白居直之、土屋和章、山下泰永が担当し、中谷高志が統括した。執筆分担は以下のとおりである。
白居直之・土屋和章：第1章 白居直之・土屋和章・山下泰永：第7章 白居直之：前記以外
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。
- 5 註は、各章末に記載した。
- 6 本書掲載の調査に関する出土遺物（第6章3に掲載した個人所蔵表採遺物を除く）及び事務書類、記録類は安曇野市教育委員会が保管している。
- 7 田淵行男氏（安曇野市名誉市民）作品の本書掲載に際しては、御遺族にご高配を賜りました。
- 8 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。（敬称略・五十音順）
青木敬、大澤慶哲、大日方一郎、桐原健、國學院大學文学部考古学研究室、島田哲男、白鳥章、田淵行男記念館、寺島俊郎、直井雅高、原明芳、廣田和穂、百瀬新治、森義直、山田真一

凡例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として次の表記を遺物注記等に使用した。
穂高古墳群 E13号墳第1次発掘調査：E13
- 2 須恵器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。 例 高環形土器：高環
- 3 須恵器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 4 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「南安曇郡」、「穂高町」のように表記した。
- 5 本書掲載の地形図は個別の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図（1/2,500）を基図とし、調製した。
- 6 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。
埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編纂委員会：編纂委
- 7 横穴式石室の部分名称は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』図28（p.30）に従った。

目次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
1 調査の概要	1
2 事業計画の概要	2
3 調査の契機と経過	3
4 試掘・確認調査	4
5 調査体制	6
6 発掘作業・整理事業の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
1 遺跡の位置	7
2 地理的環境	7
3 歴史的環境	8
第3章 調査の方法	20
第4章 層序	22
1 層序と土質	22
第5章 遺構	23
1 E12・13号墳及び浜場塚の記録	23
2 E13号墳（浜場塚）	24
第6章 遺物	36
1 須恵器	36
2 金属製品	37
3 個人所蔵表採遺物	38
第7章 調査の総括	48
1 横穴式石室の構築	48
2 出土遺物にみる稼働期と終焉期の分析と課題	51
3 穂高古墳群内の位置づけ	53
4 須恵器坏蓋・坏にみる穂高古墳群の終焉期	54
写真図版	64
引用・参考文献	72
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図	調査地位置図	1	第16図	遺物出土状況2	34
第2図	調査地航空写真	2	第17図	遺物出土分布	35
第3図	試掘トレンチ配置図	5	第18図	須恵器	39
第4図	烏川の段丘分布図	7	第19図	金属製品1	40
第5図	安曇野市と周辺の古墳・ 古代集落遺跡	10	第20図	金属製品2	41
第6図	穂高古墳群	17	第21図	金属製品3	42
第7図	グリッド配置図	21	第22図	個人所蔵表採遺物	43
第8図	基本層序	22	第23図	石室築造模式図	49
第9図	石室及び石材検出状況	25	第24図	穂高古墳群の石室	50
第10図	土層断面図	26	第25図	出土遺物群区分図	51
第11図	石室検出図	27	第26図	穂高古墳群出土坏にみる 葬祭儀礼の変化	59
第12図	石室実測図	28	第27図	F9号墳出土遺物	60
第13図	石室床面・断面実測図	29	第28図	E6号墳出土遺物	61
第14図	石積み構造図	31	第29図	周辺古墳出土土器1	62
第15図	遺物出土状況1	33	第30図	周辺古墳出土土器2	63

挿表目次

第1表	事務手続き経過	3	第6表	金属製品観察表	46
第2表	安曇野市と周辺の古墳・ 古代集落遺跡	12	第7表	個人所蔵表採遺物観察表	47
第3表	穂高古墳群E群一覧	18	第8表	遺物からみた経過	52
第4表	浜場塚の記録一覧	23	第9表	閉塞期の須恵器出土がある 抽出古墳一覧表	56
第5表	須恵器観察表	44			

写真目次

1	調査状況1	64	5	調査状況5	68
2	調査状況2	65	6	出土遺物1	69
3	調査状況3	66	7	出土遺物2	70
4	調査状況4	67	8	出土遺物3	71

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

徳高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 第1次発掘調査

所在地 長野県安曇野市徳高牧317番2外4筆

調査面積 500㎡

発掘作業 平成3年(1991)1月10日(木)～平成3年(1991)2月3日(日)

整理作業 令和2年(2020)4月1日(水)～令和3年(2021)3月31日(水)

調査契機 ほ場整備事業



第1図 調査地位位置図

2 事業計画の概要

安曇野市穂高牧地域の南部地区は、農用地帯で主に水田が占めている。本地区ではかねてより水田経営において、耕地が小さく形状が不整形であり、農道が狭小で曲線が多いこと、用水路が土・石積みのため漏水が多いことで大型機械の導入に支障があり、生産性を阻害していた。これを解消するため平成3年(1991)度に、ほ場整備事業が計画された。事業は、農業の機械化をはかり効率よい生産活動をする目的で、面積4.5haを対象に、25×80mの形状による2,000㎡の水田と、5.0m幅の用・排分離の水路を備えた道路の敷設で、平成2～4年度の3ヶ年の計画である。

ほ場整備事業の対象となる牧の浜場地籍には、穂高古墳群 E12号墳(浜場塚1号墳)(以下、「穂高古墳群」を省略する。)とE13号墳(浜場塚2号墳)の古墳跡^(図1)2基が、水田地帯の中に包蔵されていた。これらの古墳跡は、昭和39年に穂高町教育委員会が実施した古墳分布調査によって確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地として、「古墳跡E四号」「古墳跡E五号」の標柱を建てて保存されていた。

今回のほ場整備計画に先立ち、穂高町教育委員会は、2基の古墳標柱の建つ地点周辺について保護協議と合わせて試掘調査を実施し、古墳石室の一部を確認した。



第2図 調査地航空写真(令和2年度撮影)

3 調査の契機と経過

E13号墳（浜場塚2号）発掘調査は、ほ場整備に伴う緊急発掘調査で、調査原因となる事業の工事主体者は穂高町牧南部土地改良共同施行である。平成2年（1990）に遺跡保護の事前協議を行い、牧南部土地改良共同施行と穂高町教育委員会との委託契約を締結した。

第1表 事務手続き経過

	年月日	文書番号	内容
1	平成2年11月1日		試掘調査の実施承諾を土地所有者から得る。
2	平成2年11月27日		試掘調査を実施する。
3	平成2年12月14日	2穂教第12032号	牧E13号保護協議会開催通知を関係者に通知する。
4	平成2年12月25日	2穂教第12032号	土地改良共同施行委員と共和興業、農林課、県教委、町教委参加による保護協議会を開催する。
5	平成3年1月8日	2教文第7-8号	県教委教育長の「発掘調査による記録保存」の通知がある。
6	平成3年1月8日	2穂教第01024号	上記5を町教委教育長及び土地改良共同施行委員長が受理する。
7	平成3年1月9日	2穂教第11096号	土地改良共同施行委員長と町教委教育長が、発掘調査委託契約を締結する。
8	平成3年1月9日		町教委教育長から文化庁長官に埋蔵文化財発掘調査実施通知を発送する。
9	平成3年1月29日	2教文第5-248号	県教委教育長から町教委教育長及び土地改良共同施行委員長に協議協力の通知が届く。
10	平成3年1月10日～ 平成3年2月3日		発掘調査を実施する。
11	平成3年2月8日	2穂教第11096号	「発掘調査終了届」を町教委教育長から松本教育事務所長、県教委教育長に提出する。
12	平成3年2月8日	2穂教第11096号	「埋蔵文化財の拾得について（届）」を町教育長から豊科警察署長に提出する。
13	平成3年2月8日	2穂教第11096号	「埋蔵文化財保管証」を町教委教育長から県教委教育長に提出する。
14	平成3年2月21日	2教文第4-214号	県教委教育長から「埋蔵物の文化財認定」についての通知がある。
15	平成3年2月21日	2穂教第02079号	上記14の通知を町教委教育長が受理する。

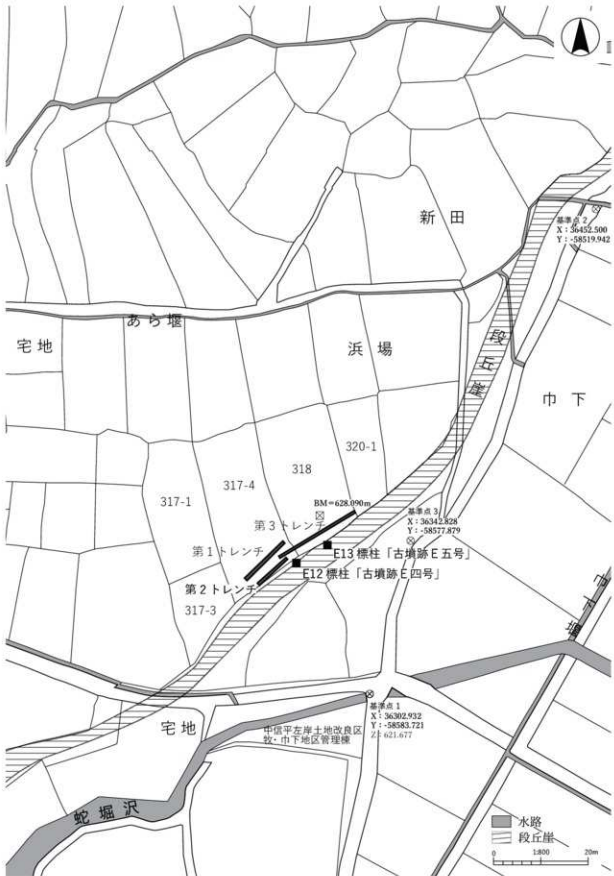
4 試掘・確認調査

平成2年(1990)11月27日(火)に、石室の構造材と思われる川原石が散在している地点3箇所(東西方向にトレンチ(第1～3トレンチ)を設定し(第3図)、試掘調査を行った。第1・2トレンチはE12号墳標柱(「古墳跡E四号」)北側、第3トレンチはE13号墳標柱(「古墳跡E五号」)北側にあたり、墳丘および主体部の確認を目的とした。本地籍では、耕作土が40cmほどと厚く、地山には、砂礫を含んだ黄褐色ローム層の堆積が認められる地域であることが知られていた。また、東方向に緩傾斜した地形ではあるが、南北に矩形形状となった水田の標高差は、隣接地で80～150cm程度となっている。第1～3トレンチのいずれも、散在する礫に注意しながら砂礫層及び黄褐色ロームの検出面までの調査を実施した。

層序は、第4章の通りであるが、水田耕作土と酸化鉄の集積層がセットで2層確認され、その下位はローム質土壌であった。第1・2トレンチでは、川原石が穂高牧317番4・318番の水田を区画する畦畔及び段丘斜面を区画する土手付近で散在して出土した。川原石の出土層位は、すべて水田耕作土(第I層)下面～砂礫が混入した暗褐色土(第II層)であり、石材は40～80cm大の楕円形礫から、15cm以下の小礫で、平面的な広がりであり、整った配列や重なりあう状況は見られなかった。また、川原石が検出された旧耕作土(第III a・b層)・ローム質土壌(第V層)は安定した堆積であった。第3トレンチでは、318番・320番1の畦畔に旧耕作土(第III a層)下位からロームブロックを混入した粘土層(第IV層)が検出され、積み重なった川原石と複数の円礫の散在を確認した。

以上のことから、第1・2トレンチ及び第3トレンチ西側にあった川原石は、E13号墳の上部構築材(石材)が散在したものであり、開墾時や耕作の度に集石されたと判断した。よって、E12号墳(浜場塚1号墳)は、古墳と誤認したものと思われる。一方、第3トレンチでは、中央から東寄りの水田耕作土下に古墳の石室を検出した。

この試掘・確認調査の結果から、ほ場整備事業に古墳が存在することが明らかとなったため、発掘調査を実施して記録保存をはかることとなった。



第3図 試掘トレンチ配置図 (牧南部地区は場整備事業平面図 (1:500) をトレース・加工)

5 調査体制

(1) 発掘作業

期間	平成3年(1991)1月10日(木)～平成3年(1991)2月3日(日)
調査主体	穂高町教育委員会
事務局	穂高町教育委員会 社会教育課
教育長	清澤久
担当者	山下泰永
作業参加者	飯沼達治、河名八郎、重野昭茂、滝沢章二、竹岡喜恵人、林忠俊、平川一男、百瀬和子、矢口秀雄

(2) 整理作業

期間	令和2年(2020)4月1日(水)～令和3年(2021)3月31日(水)
調査主体	安曇野市教育委員会
事務局	安曇野市教育委員会教育部 文化課 文化財保護係
教育長	橋渡勝也
文化課長	山下泰永
文化財保護係	中谷高志、土屋和章、横山幸子、佐藤真弓
作業参加者	白居直之、田多井智恵、宮下智美、望月裕子
その他	金属製品保存処理業務委託

6 発掘作業・整理作業の経過

E13号墳の発掘調査における現場での作業は、平成3年(1991)1月10日(木)～2月3日(日)に実施した。墳丘上の7箇所にA～Gのトレンチを設定し掘削、土層観察を行った(第9・10図)。その後、主体部石室上面の高さまで表土を除去し、墳丘面検出を試みた。削平された墳丘面に出土した石室構築石材の散在状況の記録をとり、下層への掘り下げを行った。石室壁の石積みを観察し、主体部の掘り下げを実施した。1月22日(火)に、主体部下層面までの掘り下げを完了し、須恵器、金属製品の出土を見た。下層面精査後に遺物出土記録を作成し、取り上げた。1月29日(火)に、玄室、羨道床面まで掘り下げ、精査後に記録した。その後、石室の解体をし、墳丘構築土層の確認を行なった。2月3日(日)に、調査を終了した。

整理作業は、平成3年3月中に土器の洗浄、注記、接合を終了し、金属製品の洗浄、仮保存を行った。その後、出土土器は、穂高町郷土資料館に常設展示した。令和2年度までに、金属製品の保存処理を随時終了させた。同年度、図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。

註

(註1) 牧地区では、穂高町教育委員会が「古墳跡」E1～6号、「古墳」E1～8号の標柱を設置した。

第2章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

穂高古墳群は長野県安曇野市穂高有明、穂高牧、穂高柏原、穂高に広がり、地形的には飛騨山脈東麓の扇状地上に位置する（第5図）。山麓から犀川に至る安曇平と呼ばれる平坦地は、黒沢川、烏川、中房川と複数の沢による複合扇状地によって形成され、古墳時代以来の河川開発と用水整備により、豊かな穀倉地帯として発展している。山麓沿いには古墳時代後期に属する古墳が、単独墳もしくは群集墳として、北は北安曇郡松川村から南は安曇野市堀金地域の広範囲にわたって79基が分布している。本古墳群は、明治時代以来、有明古墳群、西穂高古墳群としてその存在が知られた古跡として、県内でも注目された古墳群の1つである。

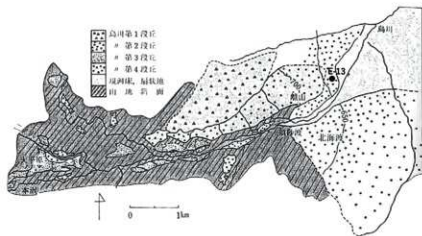
この穂高古墳群は沢筋に沿って5つの群と単独墳3基の古墳から構成される。今回、発掘調査を行ったE13号墳は、この古墳群のうちE群として分類された一群に属し、E群の中では最も標高の低い東端に位置する。なお、本書掲載の発掘調査後に、ほ場整備事業によってE13号墳は除去された。

2 地理的環境

(1) 地形

飛騨山脈を侵食して東に流下するいくつかの河川により松本盆地西縁には複数の扇状地が発達する。安曇野市内の主な河川は、高瀬川、烏川、中房川、黒沢川が挙げられ、南北に並んで複合扇状地を形成している。烏川・中房川が合流してできた穂高川と、盆地北域の大町市方面から安曇野市に向かって南流する高瀬川は、松本盆地南部域から北流する犀川と安曇野市北東部にある明科地域で合流して、長野盆地に至る。

烏川の須砂渡より上流では河岸段丘が発達し、4～5段の段丘面を形成する。低位段丘面の下流部が烏川扇状地と呼ばれる扇状地となる。烏川扇状地の扇端は不明瞭ではあるが、形成年代は更新世末～完



第4図 烏川の段丘分布図（町田1979（穂高町誌編纂委1991b掲載図を加工））

新世とされる（徳高町誌編纂委1991b）。扇状地表面は西から東に向けて、一定の傾斜をもって標高を下げていくが、幾筋かの沢による浸食によって扇尖にも起伏が生じている。今回調査したE13号墳は、烏川左岸、扇状地の扇尖部に立地する。

(2) 地質

烏川流域内の山稜のうち常念岳と横通岳は、花崗岩からなる急峻な山地となり、蝶ヶ岳・大滝山・鍋冠山は、泥岩・砂岩・チャートなど中生層の比較的平坦な山地を形作っている。これらの山地地質を反映して烏川の河床礫は、泥岩・砂岩・チャート・ホルンフェルスなどの黒色礫と花崗岩が目につく。

烏川扇状地は度重なる隆起により河岸段丘が形成され、本沢と一の沢の合流地点から離山までの間に4～5段の段丘地形が確認される（徳高町誌編纂委1991b）。ただ、それぞれの段丘面は必ずしも連続せず、複雑で対比は難しい（第4図）。第2・3段丘面は、岩盤上に、数メートルの河床礫層が堆積した岩石砂礫段丘で、礫は中生層の堆積岩類・ホルンフェルス・花崗岩類である。また、第2段丘面は、波田ローム層に覆われ、第3段丘面にもローム層をのせている。第4段丘面にはロームは分布していない。烏川の左岸には離山を挟んで、北沢と浅川が満願寺付近で合流した川窪沢が段丘面上を東流している。この川窪沢による浸食と堆積により、段丘上の一部には、中生層からの堆積岩や北沢から運ばれた花崗岩とその風化した砂礫にロームが混じった土層が形成される。本古墳は砂礫の混入したローム層を掘り下げて石室が構築され、烏川流域の段丘面と川窪沢の小扇状地の境界に位置している。

3 歴史的環境

徳高古墳群にかかわる安曇野市とその近隣地域の古墳～奈良・平安時代の遺跡について概観する。南安曇郡豊科町・徳高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が、平成17年（2005）に町村合併し、安曇野市となった。安曇野市内の遺跡番号は、旧町村の通し番号を踏襲し、豊科地域を1、徳高地域を2、三郷地域を3、堀金地域を4、明科地域を5として頭に付している。また、本古墳群は本市域内にある史跡ばかりでなく、隣接する松本市梓川・島内・島立・新村地区、北安曇郡松川村・池田町にある古墳・集落跡の構成や稼働時期、出土遺物等において共通点が多く、政治・社会的な動向と背景を考察する上で参考となる。

安曇野市の「安曇」の地名は、7世紀の郡制によって成立した科野国の「安曇郡」と安曇郡の地に居住し繁栄したとされる「安曇氏」に由来している。郡名と安曇氏の初見は、天平宝字8年（764）10月の正倉院御物布袴墨書銘で、「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊調布老端（後略）」とあることが知られている。「安曇郡」については、「和名類聚抄」高山寺本に、郡内の郷として「安曇郡、高家^{タカノ}、八原^{ヤチノ}、前科^{マエノ}、村上^{ムラカミ}」とあり、同書流布本には「安曇郡、高家^{タカノ}、矢原^{ヤハ}、前社^{マエノ}、村上^{ムラカミ}」とある。奈良時代までには、信濃国安曇郡そして4郷が成立していたことがわかる。この4郷の所在については諸説あるが、高家は、松本市梓川・島内、安曇野市三郷地域・豊科地域・明科地域辺り、八原は、堀金地域・徳高地域辺り、前科は、明科地域の一部と北安曇郡池田町・松川村、大町市南東部辺り、村上は、大町

市及び北安曇郡白馬村辺りと推測されている（南安曇郡誌改訂編纂会1968、下中1979）。穂高古墳群の築造・稼働時期は、古代律令国家による地方行政整備が行われた頃と重なり合う。本古墳群は、安曇郡八原郷に比定されている穂高・柏原・矢原地区の集落遺跡群の西側に位置している。

「延喜式」の全国の諸牧についての記載をみると、左右馬寮所属の御牧（勅旨牧）として甲斐、武蔵、信濃、上野の4か国に32牧が置かれ、信濃では、「望月牧」をはじめ16牧が挙げられている。この16牧の中にE13号墳が所在する「猪鹿牧」がみられる。御牧は、平安時代前半（9世紀初頭）には設置され、従来からの馬の生産地を基盤に整備されたと考えられている。

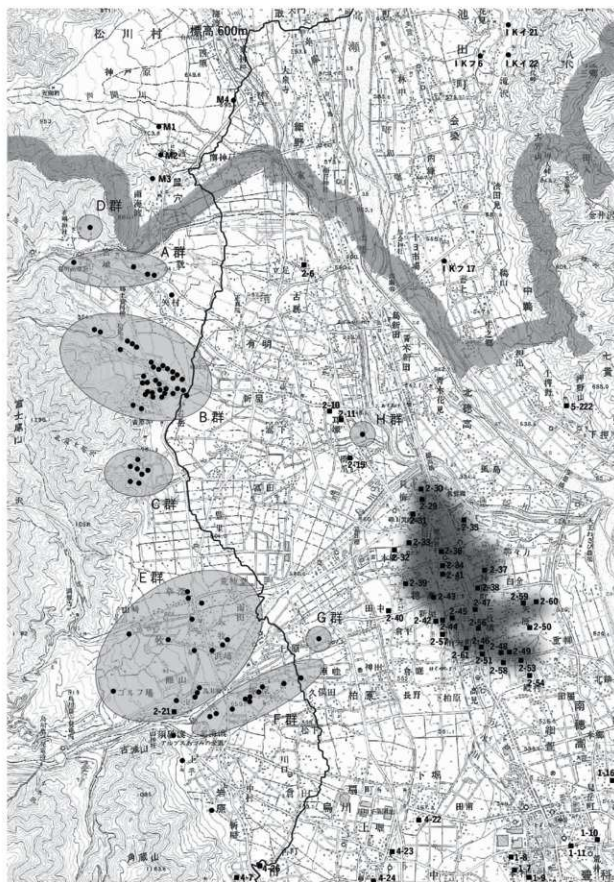
（1）集落跡・窯跡

本古墳群築造と関連する集落遺跡としては、西側山麓・沖積地域（犀川左岸）10箇所、東側山麓段丘域（犀川右岸）及び押野山山麓東側8箇所の遺跡において、発掘調査により多数の堅穴建物跡や掘立建物跡が検出されている。町村合併以前に各市町村で行われた発掘調査の内容については詳細不明な点もあるが、当該期の集落は、西側山麓域の烏川扇状地及び万木川左岸の自然堤防から南西に広がる微高地上、犀川右岸の南北に細長く広がる河岸段丘の2地域に展開している（第5図）。

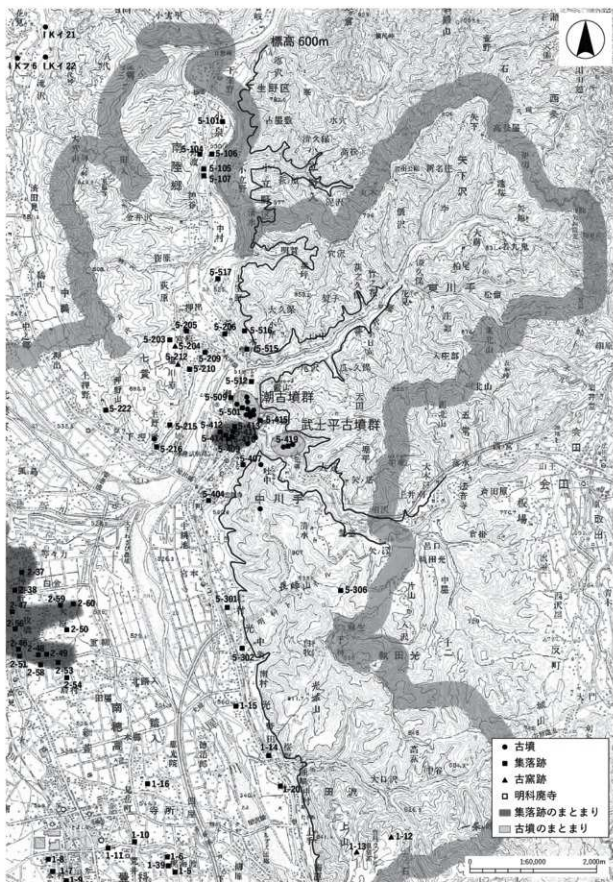
穂高地域の西側山麓・沖積地域の集落跡は、矢原地区を中心とする矢原遺跡群^(註1)としている範囲にあり、1980年代後半以後の発掘調査において遺構検出が顕著である^(註2)。藤塚遺跡(2-38)での古墳後期の堅穴建物跡30棟、掘立建物跡5棟（穂高町誌編纂委1991a）、穂高神社境内遺跡(2-36)での古墳後期～奈良前半期の堅穴建物跡2棟（安曇野市教委2018）をはじめ、矢原五輪畑遺跡(2-48)では、古墳前期～後期の堅穴建物跡5棟、奈良～平安時代の堅穴建物跡10棟、矢原宮地遺跡(2-49)からは、古墳後期の堅穴建物跡11棟、掘立建物跡3棟、平安時代の堅穴建物跡4棟、掘立建物跡1棟、馬場街道遺跡(2-53)では、古墳中・後期の堅穴建物跡5棟を含め奈良～平安時代までの堅穴建物跡が13棟と掘立建物跡1棟、中在地遺跡(2-58)では、古墳後期の堅穴建物跡5棟、奈良～平安時代の堅穴建物跡21棟、八ツ口遺跡(2-56)では、奈良～平安時代の堅穴建物跡18棟、堀立柱建物跡5棟、三枚橋遺跡(2-47)では7次に及ぶ調査の成果として、奈良～平安時代の堅穴建物跡47棟、掘立建物跡13棟が検出され、等々力町上市下遺跡(2-35)、南原遺跡(2-43)では、古墳～平安時代の堅穴建物跡が数棟検出されている。

平安時代に限る集落遺構検出遺跡は、吉野町館遺跡(1-22)、荒井遺跡(1-5)、梶海波遺跡(1-6)などがあり、盆地中央部へ集落の広がりをみせる。山麓域では、田多井古城下遺跡(4-26)、堀金小学校付近遺跡(4-24)、三角原遺跡(3-14)がある。

古墳～奈良時代の遺物が確認されている遺跡は、耳塚遺跡(2-10)、堰下遺跡(2-21)、辻遺跡(2-31)、北才の神遺跡(2-27)、四反田遺跡(2-51)、柏原遺跡(2-57)、堀之内遺跡(2-59)、矢原市上遺跡(2-60)がある。平安時代の遺物が出土した遺跡は、豊科地域では5遺跡、穂高地域では16遺跡で、原村遺跡(1-16)、町田遺跡(1-14)、本村遺跡(1-7)、柳原遺跡(1-8)、大海波遺跡(1-9)、姥ヶ池遺跡(1-10)、成相遺跡(1-11)と広範囲にわたっている。この遺跡分布状況は、従来からの指摘どおり、古墳後期頃には矢原遺跡群を中核として矢原・白金・柏原・等々力町などに集落が営まれ、律令期には地方行政



第5図 安曇野市と周辺の古墳・古代集落遺跡



設があった可能性が窺える。平安時代前半を画期として、平安時代中頃から沖積地や山麓に集落が拡散していく状況を示している。今後も矢原・柏原・穂高の遺跡群を主とする微高地域から古墳・奈良時代の集落遺構が数多く検出されることが予想される。

東山山麓・河岸段丘のうち、犀川と穂高川の合流域付近の明科市街地をのせる段丘において、古墳時代前期～奈良・平安時代に継続する遺跡がいくつかある。この地域で注目すべきは、7世紀後半～8世紀初頭に創建されたと推定される明科遺跡群明科廃寺（5-409）（以下、「明科廃寺」とする。）とその周辺の明科遺跡群である。明科遺跡群栄町遺跡（5-411）では、古墳時代後期の竪穴建物跡18棟、掘立建物跡6棟のほか溝・土坑、明科遺跡群古殿屋敷（5-413）では、古墳時代前・後期～奈良・平安時代の土坑等が検出された。また、明科遺跡群上郷遺跡（5-407）、明科遺跡群県町遺跡（5-410）、明科遺跡群本町遺跡（5-414）からも古墳前期～平安時代の遺物が確認されている。明科遺跡群より犀川下流の段丘面に立地する上生野遺跡（5-517）では、古墳時代前期の竪穴建物跡、掘立建物跡が各2棟、平安時代の竪穴建物跡5棟、潮遺跡群潮神明宮前遺跡（5-501）では、古墳時代前期の竪穴建物跡4棟、平安時代の竪穴建物跡35棟（明科町教委2000）、ほうろく屋敷遺跡（5-101）では、平安時代の竪穴建物跡20棟、掘立建物跡1棟、潮遺跡群塩田若宮遺跡（5-512）では、古墳時代と推定される竪穴建物跡1棟が検出された。祭祀関連遺跡として古墳時代前期～後期の遺物を出土した明科遺跡群龍門淵遺跡（5-412）がある。また他に、こや城（5-415）、上手屋敷遺跡（5-404）、みどりヶ丘遺跡（5-209）などから古墳時代の遺物が出土している。奈良時代以降でも明科廃寺を含む明科市街地及び、犀川沿いの周辺地域から土師器・須恵器が出土し、この一帯が地域の政治・流通の拠点となる役割を担っていたことを窺わせる。

集落遺跡に加え、東山周辺には、須恵器窯跡群として筑摩東山窯跡群（古くは芥子坊主山窯跡群）と呼ばれる須恵器、土師器、瓦の生産を展開した窯跡群がある。上ノ山窯跡群（1-13）、菖蒲平窯跡群（1-12）では、8～9世紀の窯跡が17基と竪穴建物（工房）跡26棟が検出され、更に南の松本市域の山中に田溝池窯跡群、田溝窯跡群、中の沢窯跡群、フリアン沢窯跡群、山田窯跡群と分布し、隣接する松本市岡田地区の塩辛遺跡では7世紀に遡る窯跡の存在を裏付ける須恵器が出土している。この東山窯跡群で生産された須恵器は、安曇・松本地域に供給されていることが確認されている（豊科町東山遺跡調査会1999）。明科地域の犀川右岸の河岸段丘上に営まれた集落と対峙する左岸地の押野山山麓の塩川原地籍に桜坂古窯跡（5-212）と9基の宮原古窯跡（5-204）がある。桜坂古窯跡では、須恵器、瓦とともに鴟尾の生産が確認され、生業に関わった竪穴建物跡からは7世紀末～8世紀前半の操業が推定できる須恵器が出土している。

（2）古墳

穂高古墳群の分布について、南安曇郡もしくは古代の安曇郡内として捉え概観する。以下では、本市に隣接する北側の松川村から南側の松本市梓川地区までの西山山麓域に立地する地域（古墳分布域①）、犀川右岸の河岸段丘・筑摩山麓に立地する地域（古墳分布域②）、高瀬川左岸と犀川が合流する左岸の中山丘陵に立地する地域（古墳分布域③）の3地域の順で概要を記載する。

古墳分布域①は、穂高古墳群が所在する地域で、犀川、高瀬川、筑摩山麓を一望できる一帯に分布している(第6図)。この地域の古墳立地は2基の古墳(G1号墳(上原古墳)、H1号墳(大塚塚))以外概ね標高600m以上の扇状地扇頂部付近に位置し、河川氾濫原にないことがわかる。山麓北側の北安曇郡松川村には、祖父が塚(M1)、桜沢おかめ塚(M2)、牛窪(M3)の単独墳として3基が確認され、鳥奴遺跡(M4)周辺に古墳の存在を窺わせる遺物出土がある。このうち祖父が塚古墳は、一部損壊しているが墳丘・石室の規模と構造、出土遺物の確認ができる古墳であり、穂高古墳群の一画をなしたと考えられる。穂高地域に所在する穂高古墳群は、沢沿いに8群に分類され、A群8基、B群29基、C群5基、D群1基、E群17基(E12号墳を含まない)、F群10基、G群1基、H群1基の72基が確認されている(注3)(穂高町誌編集委1991a、安曇野市教委2015)。烏川右岸に所在する堀金地域には、F群の南に展開する須砂渡口南古墳、岩原古墳、前の髪古墳、古城下古墳の4基と曲尾古墳群1つがある。ただし、古墳の構造、規模、遺物などの情報が把握されているものは、前の髪古墳1基である。三郷地域では、北小倉1・2号墳を含めて5基が土饅頭状の小墳丘として確認されているが(注4)、古墳との確証はない。西山山麓南端の松本市梓川地区でも3基ほどの土饅頭状の小墳丘の記録があり、三郷地域と同じ状況である。つまり、現段階で堀金地域南城から梓川地区の黒沢川、鳴沢川扇状地までに古墳はない。

古墳分布地域②のうち明科地域では、金山塚古墳(潮1号墳)をはじめとする潮古墳群8基、能念寺古墳群3基、大足地区の武士平古墳群2基、上郷古墳の14基が確認されている。注目すべきは潮古墳群である。調査が行われた6・7・8号墳は、いずれも明確な周溝をもつ古墳であり、横穴式石室の下面までの削平があったにもかかわらず主体部と周溝内から須恵器を主体とする多量の遺物が検出され、副葬品の質・量とあわせ、地域の中心であったであろう氏族の存在を窺うことができる(明科町教育委員会2000・2005)。6号墳の周溝内と羨道から出土した須恵器には7世紀中葉以後の坏蓋、高坏、長頸壺などが含まれ、8世紀前半の坏蓋、坏、平瓶等が主体を占めていた。1号墳である金山塚は、明治45(1912)年頃発掘調査され、径20m・高さ0.7mの円墳と報告され、直刀、刀子、轡などの馬具が出土している(明科町史編集委1984)。

古墳分布域③は、北安曇郡池田町の高瀬川左岸と明科地域の犀川左岸に所在する古墳である。池田町の遺跡分布調査(池田町教委1994)と出土遺物、現地踏査から少なくとも7基の古墳が確認できる。石室構造が確認できるものは鬼の釜古墳1基のみであるが、周辺にある糠塚古墳と塚穴遺跡を含めた3基が古墳群であったと考えられる。他の4基は単独墳で、直刀等が出土している古墳もある。明科地域では、高瀬川と犀川の合流する左岸段丘、中山山地山麓裾部に一部石室とされる痕跡を残す押野の上野屋敷古墳が1基あるのみで、犀川左岸沿いに古墳はない。

このように穂高古墳群とその周辺地域の古墳は、穂高古墳群72基に堀金地域の5基、松川村の4基、池田町の古墳7基、明科地域の15基(②14基、③1基)と計103基となる。

弥生時代後期～古墳時代前期の西山山麓・沖積地域では、発掘調査による当該期の遺物採集が増加傾向にあるものの、集落跡と認識できる遺構は三枚橋遺跡の弥生後期の竪穴建物跡数棟と矢原五輪畑遺跡の古墳時期竪穴建物跡3棟のみで、検出数はきわめて少なく、分布は希薄である。犀川右岸の河岸段丘域では、光遺跡群北村遺跡に弥生後期の竪穴建物跡があり、古墳時代前期の集落としては、上生野遺跡、

瀬遺跡群瀬神明宮前遺跡から竪穴建物跡が検出された。この時期の集落は、単独の小規模集落として点在し、集落域として断続している。

古墳時代中期に至っては、馬場街道遺跡の竪穴建物跡2棟、龍門淵遺跡の祭祀遺構が検出されているが、東西山麓域ともに土師器が散見される程度で集落の痕跡を見つけることが困難である。近年の沖積地の発掘調査において、旧地形の微高地と低地が洪水堆積物によって深く埋没している状況がいくつか報告され^(注5)、今後の調査によって、集落遺構が見つかる可能性は高いものの、現況では、扇尖部の微高地と厚川の右岸河岸段丘に7世紀以降の集落が展開、拡大している。

近隣の松本・大町地域では、弥生中期後半～後期、古墳時代前期後半には大規模な集落跡がみられるのに対し、安曇野市内では、1～6世紀中頃まで居住域としては希薄・空白地域である。その地に、6世紀後葉から定住がはじまり、7世紀には矢原遺跡群と明科遺跡群を中核とした大集団が突如出現したこととなる。更にこの地域の集団は、7世紀後半～8世紀初頭に100余基に及ぶ古墳群を築造するまでに繁栄し、古代律令国家の中央・地方組織に組み込まれていくようになったと推測できる。

(3) 穂高古墳群

穂高古墳群は河川の流域ごと群別の作業を行い、単独墳を含めてA～Hの8群に分けており、北より中房川左岸から油川流域のA群8基、天満沢川流域のB群29基、富士尾沢流域のC群5基、烏川左岸のE群17基（E12号墳を含まない）、烏川右岸のF群10基がある。単独墳として北よりD1号墳（魏石鬼窟）^(注6)、H1号墳（大塚塚）、G1号墳（原古墳）がある。穂高古墳群の研究史については、『穂高町誌』（穂高町誌編纂委1991a）、「安曇野市の埋蔵文化財第8集」（安曇野市教委2015）及び國學院大學文学部による「長野県安曇野市穂高古墳群」の各報告書（青木ほか2019など）を参照されたい。この穂高古墳群72基のうち、石室構造もしくは出土遺物の帰属が明確で、記録がある古墳は、A1号墳（陵塚）、A6号墳（犬養塚）、B1号墳（ちいが塚）、B5号墳（金塚塚）、B23号墳（祝塚）、D1号墳（魏石鬼窟）、E6号墳（狐塚3号墳）、E7号墳（狐塚2号墳）、F1号墳（一本杉古墳）、F9・F10号墳（三つ塚）の2基、G1号墳（原古墳）の12基であり、同じ山麓域の祖父が塚（松川村）、前の髪古墳（堀金烏川）の2基を加えても14基と、調査資料に乏しい状況である。

石室記録・副葬品記録資料等が少ないながら、古墳群の属性や被葬者の性格について、追究がなされている。松尾昌彦は、A～C群が標高の高い扇頂部にのみ分布しているのに対し、E・F群は扇頂部から扇尖部近くまで分布しているとして、2つの古墳群を想定した（岩崎ほか1983）。また、A～C群の石室の規模を3類型に分類し、主軸方向との相関を見出し、A・B群が更に小支群に分けられることと造営時期の違いが見いだせることを考察した。そして、副葬品等を勘案し本古墳群が6世紀後半～7世紀前半の比較的短い時期に造営され、石室形態に明確な差異が存在しないことを指摘した。三木弘は、墳丘と石室規模が各群の中で卓越している古墳が墓域内の標高の高い場所に占地し、いずれも古墳群形成期である6世紀後半まで遡る可能性が高いことから、築造段階で各群には石室規模や立地に規制がかけられたのではないかと予測した（三木2011）。また、本古墳群の副葬品組成が、土器（須恵器）、装身具、武器、馬具であることを確かめつつ、同一古墳でも馬具を副葬しない被葬者が葬られた可能性を見

出した。ただ、石室規模や副葬品の差があるものの、本古墳群全体が均質的であることを強調した。そして、この古墳群形成は、被葬者集団が結束力の強い単一の氏族集団であり、この母体を構成する小集団が均質的であることに由来すると捉えた。本古墳群を築造した氏族について、穂高神社との関連を含めてその出自を海人族とする論考も数多くある。

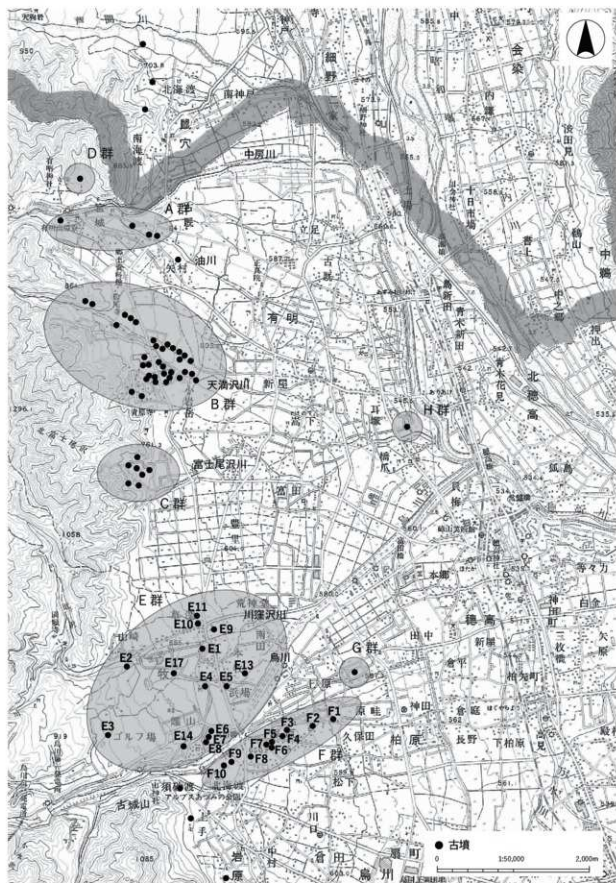
なお、國學院大學文学部考古学研究室では考古学実習を兼ねて、平成21年(2009)度～令和元年(2019)度の9次にわたり穂高古墳群F9号墳(二つ塚)の継続調査を行い今日に至っている^(註7)。緻密な調査をもとに石室、副葬品等の分析を行い多くの成果を得ている。

(4) 穂高古墳群E群

本古墳が属するE群は、烏川と川窪沢川に挟まれた南北約1.5kmの台地及び川窪沢川左岸に分布し、既に壊滅した古墳も含め17基が確認されている。E群は、他の古墳群が沢沿いに分布しているのと異なり2×1.5kmの広範囲に点在し、標高が最も高いE3号墳とE13号墳との比高は約150mとなる。本群では、E6号墳(狐塚3号墳)が明治44年(1911)、E7号墳(狐塚2号墳)が昭和26年(1951)に発掘調査された。

明治44年(1911)6月に発掘したE6号墳(狐塚3号墳)について、『南安曇郡誌』(旧)(長野県南安曇郡1923)では「縦六丈六尺、横五丈五尺、高さ一丈二尺なり」(縦20m、横16.6m、高さ3.6m)「副葬品中、横瓮一個、陶製蓋一個、鉄製袋穂槍身一個、刀身三個、鉄鎌二個は帝室博物館に納め、瑪瑙製曲玉、管玉、水晶製切子玉、計十数個は穂高神社に納め、鐙(赤銅製は角型、銀象眼銀鍍金)、直刀數本、金環、青銅製銅、銅、齋部瓮、同上横口瓮は満願寺に納められたり。其の他に直刀、馬具等多数出たれども散逸せり」とあり、『南安曇郡誌』(新)(南安曇郡誌改訂編纂会1968)では更に「人骨も発見されている」と記載している。E6号墳(狐塚3号墳)は、墳丘の規模と副葬品については、『長野県史』『穂高町誌』の編纂等の事業を通して再見分・再整理がされ、副葬品の組成と築造・稼働時期が明らかになった。確認できる副葬品は、武器として、直刀8振、鐙1点、鉄針1点、鉄鎌1点、素環鏡板付 釧 2点、装身具として勾玉、管玉、切子玉、白玉などの玉類と金環が複数、青銅製銅があり、出土土器はすべて須恵器で、長頸瓶、平瓶、横瓶、高坏、蓋がある(第28図)。一方、石室に関する情報は皆無であり、構造を知る手掛かりは今後に委ねられている。

E7号墳(狐塚2号墳)について、『南安曇郡誌』(新)には「墳丘の径15m、高さ2mと推定され、外形は石室の積み石が大部分露出し花崗岩の巨石が蓋石に使われていた。石室の長さ225m、高さ1m、幅2.1m、羨道の部分と思われる部分や入り口が南方に大きくふくれていて、側壁のうち、南の部分全体は荒らされ北の側壁は原型をとどめてプランは梯形をなし、蓋石は旧の面影がなく、唯三個が旧の位置と思われた。(略)約40輦の面に金環及び鉄鎌の破片・鉄鎌を発見し続いて直刀2本がそれぞれ刃を外側に向けて出土し、その近くから刀子らしい破片が2本出土した。(略)羨道と玄室との区別は明瞭でなく、ただ敷石によってその差別が考えられる程度である。玄室と思われる部分は前室と後室に分かれ、前者に刀類があり後者には何もなかった。金環は羨道と思われる部分から1個出土し、敷石は3、4個を用いて境とし、2列で奥行4.25米、幅3.1米の間に平行して置かれていた。床は地表面と同一で、



第6図 穂高古墳群

第3表 穂高古墳群E群一覧（穂高町誌編纂委1991aから作成）

No.	古墳名称	墳丘 (m)		石室 (m)			主軸	出土遺物	備考 (現況)
		径	高	長	幅	高			
E1	西牧塚	120	0.6						
E2	三郎塚	140	1.4	2.0	1.3	1.2	S20°E	土師器・須恵器	
E3	十三屋敷西古墳			5.0	1.3		S50°E		最高位の標高に立地
E4	藤塚								天井石残存か (灌滅)
E5	土人塚	120	2.3						
E6	狐塚3号	198 165	3.6					直刀8・鐔1・鉄錐1・鉄鎌1・素環鏡板付簪2・勾玉7・管玉・切子玉16・白玉11・金環6・銅圓1・長頸瓶・平瓶・横瓶・高坏・蓋	
E7	狐塚2号	150	2.0	5.0	2.1		S15°E	直刀(2)、刀子・鉄鎌(1)、鐔(1)、金環(1)	
E8	狐塚1号	100	1.0						
E9	前田塚	5.0	1.0						灌滅
E10	寺島塚	8.5	1.5					武器・装身具	
E11	神谷塚								灌滅
E12	浜塚塚1号								本報告
E13	浜塚塚2号	8.9		8.6	1.8		S17°E	須恵器・武器・装身具(表採)	本報告
E14	羅山1号	100	1.0						灌滅
E15	羅山2号	100							灌滅
E16	露塚								位置不明 (灌滅)
E17	ジョウシハウ殿	6.3	0.6					直刀、人骨	灌滅
E18	羅山3号								灌滅
E19	E19号墳	3.5 4.5	1.5						

塚の高さ0.8～1米であった。本古墳の副葬品は、直刀(2)、刀子・鉄鎌(1)、鐔(1)、金環(1)などがある。」と記載されている。E7号墳(狐塚2号墳)の石室構造について、調査記録を参考にすると「無袖の横穴式石室で、残存する規模は、開口部から奥壁までの長さ6.5m、羨道4.25m、幅2.1～3.1m、玄室は2.25mで前・後室の2室に分かれ、それぞれに棚石があった」と解釈される。記録写真から構築した石材を見ると、楕円形の川原石と礫を砕いてかたどった割石、角石も用いられている。副葬品で、現存するものは、金環と鉄鎌のみである。

E6号墳(狐塚3号墳)について三木弘は、須恵器から6世紀末、7世紀初頭、7世紀前葉、8世紀前葉の時期を導きだし、2～3次の追葬を想定した(三木2011)。さらに、本古墳群の副葬品組成が、土器(須恵器)、装身具、武器、馬具であることを確かめつつ、同一古墳でも馬具を副葬しない被葬者が葬られた可能性を見出した。

E群について桐原健は、立地や古墳間の距離などをみて、F群と同一の古墳群とする見方があり、E群の被葬者集団について、古墳群の所在地が「猪鹿牧」と重複することから「御牧」となる前身集団の

墓域の可能性を指摘している（桐原1991）。これに対し、E群内のいくつかの古墳で、副葬品の組成から馬具が欠けていること、その他の群と組成が変わらないことから、E群だけを「牧」と関連付けることに否定的な考え方もある（三木2011）。

註

- (註1) 矢原遺跡群の範囲については「安曇野市の埋蔵文化財第21集」（安曇野市教委2020）の「第8章調査の総括」における「穂高・穂高柏原の古代遺跡群」とした内容に準ずる。
- (註2) 各遺跡の調査成果の概要については、調査担当者である山下泰永の所見による。
- (註3) 穂高古墳群の古墳数については、湮滅して文献上でしか確認できないもの、湮滅したが遺物出土によって確実に存在の確認があるもの、踏査によって新発見の古墳と認識されるもの等があり、文献により異なる数値となっている。ここでは、「穂高町誌」（穂高町誌編纂委1991a）に掲載された古墳数とした。「安曇野市の埋蔵文化財第8集」（安曇野市教委2015、第12表（p.32））を参照されたい。
- (註4) 「南安曇郡誌」（旧）及び「南安曇郡誌」（新）等には、北小倉1・2号墳、浄心寺南古墳、アルプス学園前古墳、平福寺付近古墳など5基の古墳記載があるが、遺物出土、石室検出などの報告はなく、古墳の確認は得られていない。「三郷村誌Ⅱ」第2巻歴史編上（三郷村誌編纂委2006）は、「三郷村でも古墳と明確に認められるものは現在までに確認できないという結論となる。」としている。
- (註5) 芝宮南遺跡（G1号墳（上原古墳）から1.2km東）では、現地表面下200cmの深度で弥生土器が検出された（安曇野市教委2016）。南原遺跡では、地表面下25cmで弥生土器が検出された地点と、そこから約10m離れた地点の120cm深度で須恵・土師器片が検出された事例がある（穂高町教委2001b）。
- (註6) 魏石鬼窟の表記については「魏磯城窟」の表記もあるが、「穂高町誌」（穂高町誌編纂委1991a）に従った。
- (註7) 令和2年（2020）度の発掘調査は、実施しなかった。

第3章 調査の方法

今回の発掘調査は、穂高牧南部地域のは場整備事業として、穂高牧の浜場地籍にあるE12号墳（浜場塚1号墳）とE13号墳（浜場塚2号墳）が対象となった。2基の古墳は、昭和30～40年の分布調査による踏査と地権者への聞き取り等によって古墳跡として認識され、標柱によって位置が特定されていた。ただし、地表面からは墳丘、石室等の埋葬施設は確認できず、調査範囲及び深さは不明であった。は場整備事業による造成計画が、現耕作土から150cmほどの深さまで掘削した後に、整地が実施されることから、埋葬施設の有無を含めて、状況を明確にした後に発掘調査を実施することとなった。

試掘・確認調査は、段丘崖の縁にある2基の標柱から北側水田に東西方向のトレンチを3箇所設定した（第3図）。トレンチの掘り下げは、重機で、耕作土を掘削し、下層は重機と手掘りを併用して行った。第1・2トレンチでは、耕作土層下から砂礫を含んだ黄褐色ローム層が検出され、遺構がないことが確認できた。第3トレンチでは、現耕作土下から川原石の広がりが見られたため、作業を人力で行い石室の側壁を検出した。

発掘調査では、墳丘規模及び墳丘構築方法、石室規模及び壁体の構造等を確認するためトレンチを7箇所（A～G）に設定し、手掘りによる掘り下げを行った。各土層の断面観察から周溝及び盛土の状況を確認した。トレンチ調査終了後に、周辺の耕作土を掘り下げ、散在した石材と石室上部までの検出状況を写真と図面記録した。その後に、石室内を上層から精査し、構築石材と遺物出土状況を記録しながら床面まで掘り進めた。

測量作業は、真北を基準に5mグリッドを設定しこれを基としたが、国家座標値は導いていない^(註1)。

整理作業は、平成3年（1991）度と令和2年（2020）度に分けて、土器の洗浄、注記、接合、実測、図版作成、写真撮影及び報告書作成を行った。また、金属製品の保存処理は平成29年（2017）度～令和2年（2020）度に委託事務として実施した。遺物注記は、調査略号である「E13」を使用して以下のとおりに表記した。

遺物注記例 E13 91.01.00（日付） No. ■
E13 91.01.00（日付） ■（出土位置）

註

(註1) 第3図の基準点座標値は、は場整備事業終了後の新たな水田区画・道路造成地形図上から復元して数値をあてはめたものである。



第7図 グリッド配置図

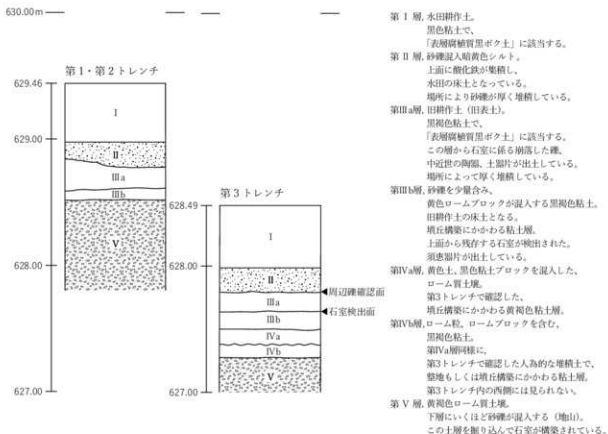
第4章 層序

調査地点は、烏川扇状地の扇頂部に位置し、南西から北東方向に緩やかに傾斜している。浜場地帯は、比較的平坦な地形で、扇尖部から犀川との合流点までの景色を見渡すことができる。本古墳は、烏川と川窪沢川の間には挟まれた穂高古墳群E群に属し、E群の中では最も標高が低い。浜場地帯は標高640mの蛇堀沢口から北東方向に比高6～10mほどの段丘崖が走り、南側の低い段丘面には巾下の地名が残る。本古墳は、段丘縁に位置している。

1 層序と土質

烏川左岸側の扇頂周辺には、『穂高町誌』によると「表層腐植質黒ボク土」と「礫質灰色低地土」の土壌群が分布する（穂高町誌編纂委1991b）。段丘上に立地する平坦部一帯は、開田以前には畑作主体の耕作地として利用した状況が窺え、調査地点周辺の層序はほぼ一定している。

試掘調査では、2基の古墳を想定し、第1・2トレンチはE12号墳（浜場塚1号墳）、第3トレンチはE13号墳（浜場塚2号墳）の遺構確認のために設定した。この土層柱状図を、第8図に示した。



第8図 基本層序

第5章 遺構

1 E12・13号墳及び浜場塚の記録

穂高古墳群は、昭和39年(1964)から穂高町教育委員会によって本格的な分布調査が実施され、漸次古墳の標柱を建てて周知してきた。本地籍における古墳は、玉類出土の伝承と石材の散在状況を根拠としてコンクリート製標柱(古墳跡E四号・E五号)が建てられた。今回の発掘調査によって、E12号墳(浜場塚1号墳)については、前述した試掘・確認調査において、古墳でないことが明らかとなった。このE12号墳について、文献上で「古墳」となり、「出土遺物」がどうであったかの経緯について以下の表に整理した(第4表)。これによると、昭和43年(1968)の時点では、1基であったものが、昭和45年(1970)の時点で2基となり、平成3年(1991)では管玉、切子玉がE12号墳から出土したことになる。平成3年の『穂高町誌』発行以後は、複数の遺跡調査報告書の遺跡環境等の記載に引用されることとなり、訂正されないうま今日に至っている。本報告をもって、E12号墳(浜場塚1号墳)と出土遺物を抹消されたい。また、出土したとされる管玉、切子玉等については、古墳出土に限定できないものの、周辺出土の可能性を残している。

第4表 浜場塚の記録一覧

年	文献	記載(記載ページ)	備考
大正12年 (1923)	『南安曇郡誌』(旧)	□(一文字アキ) 鳥利八、教謙田(pp.223-225)	左の記載が浜場塚か?
昭和31年 (1956)	『信濃史料』第1巻上	(No.)1961 塚原塚田 平地 浜場塚(門) 管玉・切子玉僅かに残る。嘗て附近に多数の積石塚ありしも今なし(p.550)	1基と認識している。
昭和43年 (1968)	『南安曇郡誌』(新)	13号墳(通称浜場塚) 墳丘はわずかに残り、副葬品と思われる管玉・切子玉が出土している。かつて、付近に多数の積石塚があったと言うが、その内容についてはわからない。(p.119)	
昭和45年 (1970)	『穂高町の古墳』	跡E4が西、跡E5が東(p.26分布図)	この時点で、浜場塚2基に。教317が西、教318が東。
		E跡四 浜場塚1号 318口 宮島良門 E跡五 浜場塚2号 317イ 宮島忠彰 (p.28-一覧表)	誤記か? 「E跡四」が317イ、「E跡五」が318口だろう。
		古墳跡E四号(新田) 通称浜場塚という。今は水田となって古墳の跡はなく、土地の人の話によって古墳跡E四号とした。(p.55)	西側の古墳の記述
		古墳跡E五号(新田) 通称浜場塚という。開田のため古墳のあと不明であるが南側の畑に天井石。石室の石らしいものが二、三個散在しており土地の人の話によって古墳跡E五号とした。(p.56)	東側の古墳の記述
昭和56年 (1981)	『長野県史』考古資料編全1巻遺跡地名表	852番 浜場塚古墳 所在地浜場新田318 扇状地(古) 円 管玉・切子玉(p.292)	
平成元年 (1989)	『穂高町の古墳群とその人々』	12号墳(浜場塚)、13号墳(浜場塚) →まとめて遺構・遺物に。円(墳)・管玉、切子玉、古墳跡E4号、古墳跡E5号(p.77-一覧表)	
平成3年 (1991)	『穂高町誌』 歴史編上・民俗編	浜場塚一号古墳(E一二号古墳、牧地区新田) 上人塚より東へ三〇〇メートル下った水田中にある。管玉、切子玉が出土しているという。 浜場塚二号古墳(E一三号古墳、牧地区新田) E一二号古墳と並んで水田中にある。墳丘径は一〇メートルほどと推定される。なお、かつて付近に多数の積石塚があったというが、その内容についてはわからない。(p.88-89)	E12号墳(浜場塚1号墳)から管玉、切子玉出土とあるが、過去の文献等での根拠がない。→浜場塚一帯から出土と解するのが妥当。 E13号墳(浜場塚2号古墳)は墳丘が残存していることがわかる。

2 E13号墳（浜場塚）

墳形・周溝	不明（10～12m 程度の円墳の可能性があり、明確な周溝は確認できなかった。）		
主体部	無袖横穴式石室 全長8.6m 主軸S17°E		
玄室	長さ5.68m（西側壁）・5.36m（中軸線）	幅（奥）1.88m（最大）	
	奥壁残存高1.1m	西側壁残存高1.2m	
羨道	長さ2.92m	羨門（幅）0.88m	
	玄室と羨道の区分は石積み、床面状況から判断した。		

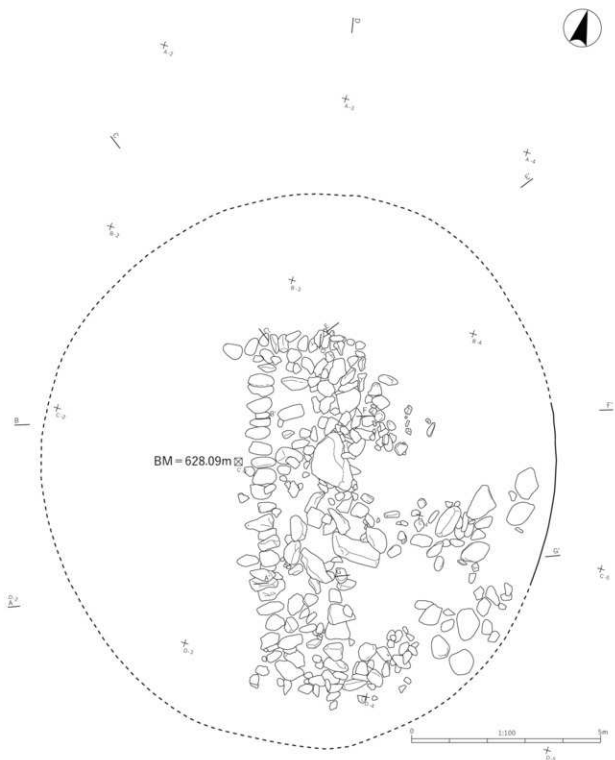
(1) 石室検出状況

墳形は、後世の整地・耕作等の攪乱により、全てが破壊され不明である。石室東側のF・Gトレンチ断面と石室西側のAトレンチにおいて、構築時の粘土層（第Ⅳa・Ⅳb層）を確認し、盛土の縁辺と判断した。F・Gトレンチでの第Ⅴ層への掘り込みと第Ⅳ層の南東への広がり及び黒褐色粘土層（Ⅲb層）の堆積状況から、径10～12m程度の円墳であったと判断できる。墳丘に散在する川原石及び破砕礫は第Ⅲa層下層、第Ⅲb層上層までの検出で、墳丘及び盛土内からの出土はなかった。また、各トレンチからも石室構築石材以外、埋土中から礫は出土していない。主体部は、無袖の横穴式石室で全長8.6m、主軸S17°Eとなる。玄室の長さは、5.68m、奥壁幅は1.88mで羨道部方向に少しずつ幅が狭くなっている。羨道の長さは2.92m、西壁はやや内弯して斜めに南の開口部に至る。開口部の最小幅は、0.88mである。天井石と東壁の上部及び奥壁近くの約1mが失われていたため壁高は不明である。残存する奥壁高は1.1m、西壁高1.2mであった。石室の構築石材は、羨道部の自然崩落のほか、開墾時の整地と東奥壁側からの侵入による破壊、抜き取りによって石室内と石室東側斜面に散在していた。また、開口部が段丘縁の縁に位置するため、前庭部が削平されていた。開口部の削平は、古墳構築後の河川による浸食と人為的な耕地造成の影響によるものと推測される。

石室に用いられた石材は、石室東側の第Ⅲ層内に散在して検出され（第9図）、構築材となる70cm大の長楕円形の礫が多数出土した。その中には、天井石と思われる一辺1.8m大の破砕礫も2個出土した。東側壁の奥付近では、破砕された小礫が散乱し、石室床面にまで及んでいた。北東側壁は基底石数個が抜かれ破壊の著しい箇所が盗掘抗の跡と推測された。羨道には、大中小の夥しい礫が積み重なり開口部まで塞がれ、開口部から2.0mほど内側の玄室床面上に長辺1.0mほどの大形長楕円の礫をはじめ50～60cm大の礫が重なって検出された（写真図版1）。これらの石材は、玄室を閉塞した石と推測された。この大形礫北側（玄室側）からは坏蓋、坏、直刀が良好な状態で一括出土し、玄室を塞いで間もなく羨道の崩落があったと考えられ、良好な遺物の遺存状況であった。開口部東壁付近は、盗掘の影響が及ばなかった場所であった。

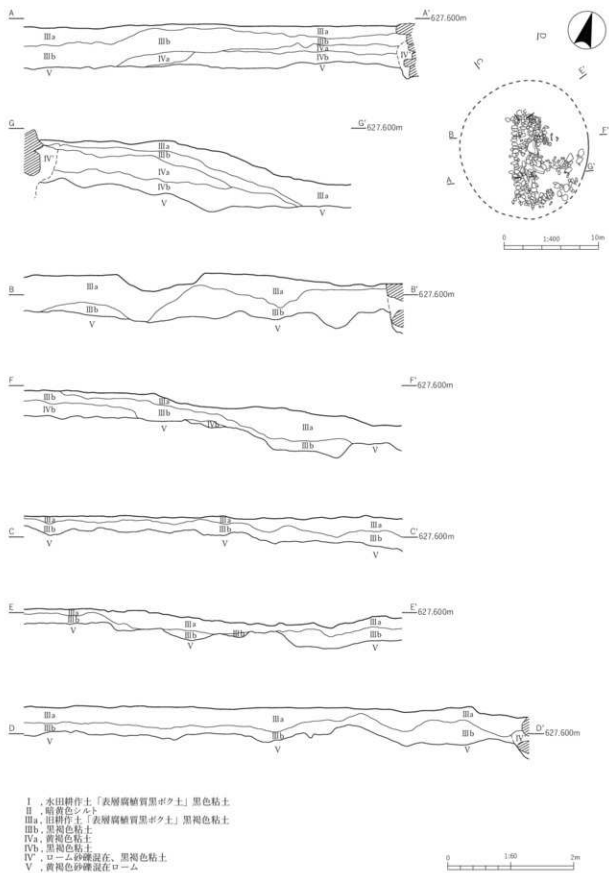
玄室と羨道と区別する立柱石はないが、基底石と石積みの違いによって明確に区分された。羨道は開口方向に床面が緩く下り傾斜して検出され、側壁の基底となる中形の川原石が斜面に沿って入り口方向に深く配置されていた。羨道がどの程度埋め戻して整地されていたか不明確であったが、第Ⅴ層までの

掘り込みは深く玄室入り口部と開口部の比高は0.4mであった。石室の構築段階は、玄室より羨道を深く掘り、側壁の石積みをしたと解釈できる。トレンチ調査と側壁確認調査において、奥壁・側壁を外側から支える礎は検出されず、裏込めに黄褐色ロームの混入した黒褐色粘土（第Ⅳ層）を用いて固めていた。また、A・Bトレンチの断面観察、周辺の礎の散在状況で上部に礎が検出されなかったことから、控積みにも石が使用されなかったことを確認した。

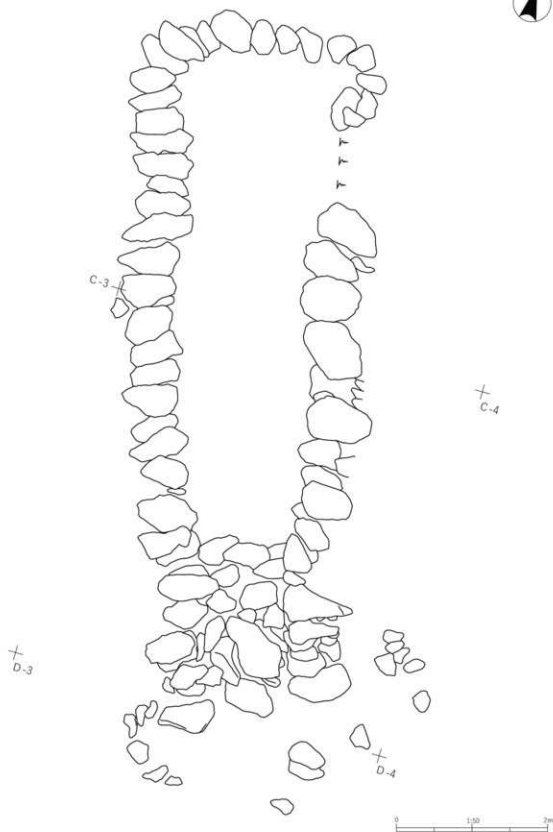


第9図 石室及び石材検出状況

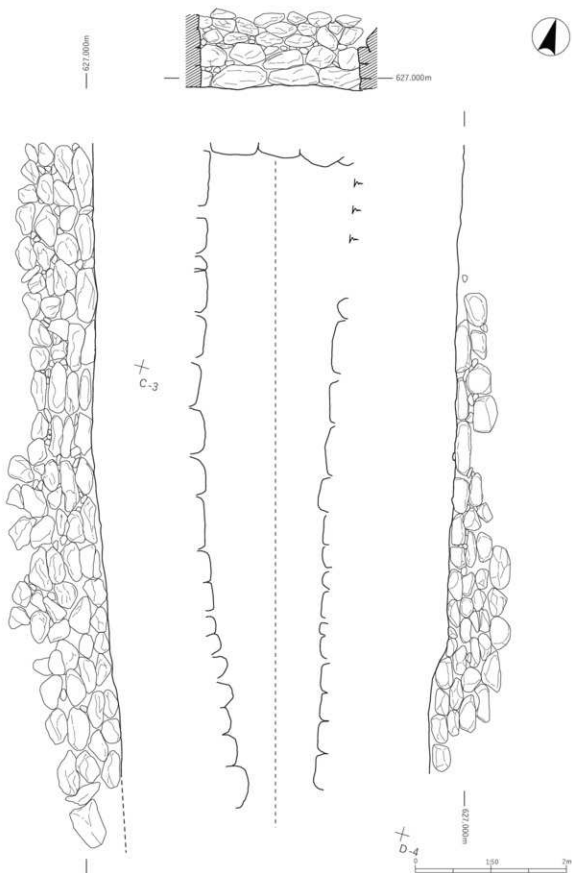
第5章 遺構



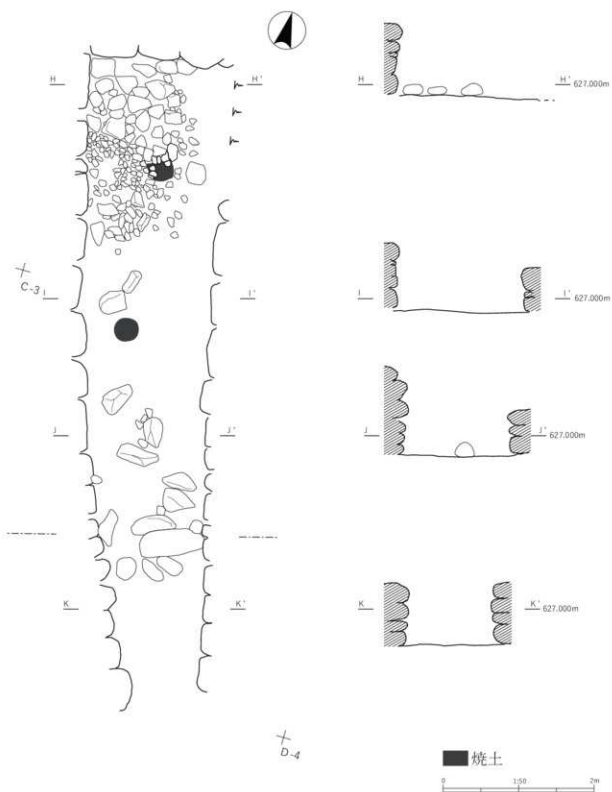
第10図 土層断面図



第11図 石室検出図



第12図 石室実測図



第13図 石室床面・断面実測図

(2) 石積み構造と石室プラン

石室の天井石及び壁面上部と東側壁の一部が失われていたが、残された側壁と奥壁から石室の形状と石積み構造について触れることとする。本古墳群の石材の中心は、中房川・烏川が供給する花崗岩の川原石を主とし、本古墳も烏川の大形花崗岩を利用して構築されていた。石材は、すべて角が丸く滑らかで形状の似かよった川原石をそのまま利用し、場所によってはその川原石を破碎して用いていた。山麓に分布している他の古墳が周辺に露頭している角礫を利用しているのとは異なり、表面が磨滅した川原石を持ち込んでいた。

石室は、第V層を30～50cmほど掘り込んだ礫混じりのローム層上に、基底部となる大形の平石（基底石）を均等に配置し、ほぼ長方形の玄室平面プランを形作っていた（第14図）。

奥壁は、約50cmの厚みを有する短辺70cm前後の大形礫の小口面を石室面に3個を基底石として配置し、2段目を60cmの不正形の大形礫、3段目以上を40cm前後の川原石に小礫を詰めて、やや内側にせり出すように小口積みされていた（奥壁の支えとなる石積み）。

側壁の基底石は、奥壁から開口部方向に中軸線上で約3.0mまでを長径70～85cm前後の扁平な川原石、3.0m地点から5.4m地点までを長径60～70cmの川原石を用いて、横面（長径面）を石室に向けて配置され、西壁には9個、東壁には5個が残っている。基底石の上には扁平形状を作りだすために破碎した礫が数点見られたものの短辺50～60cm大の自然礫が小口積みされ、こぶし大の詰石とともに約110cmの高さまで残存していた。奥壁から3.0mと5.4m地点の石積みは、基底石から垂直に4個の礫が布積みされ、この2箇所を基準に側壁が構築されていた（第14図①・②、側壁の基準となる石積み）。この地点までの5.4mを玄室と捉えた。5.4m地点から開口部までの石積みは、短辺40～50cmの楕円形・不正形礫などが基底となり、上部には基底石よりやや大形の礫が積み上げられ、基底石の規格を超えた礫が3段目まで積まれていた。壁面の礫は、5.4m付近を境に小形で丸味を帯びた形状の川原石に変わり、玄室と羨道の川原石の選択と構築方法が明確に区別されていることが窺えた。

残存する西側壁を更に詳細に観察すると、奥壁から3.0m（①）と5.4m（②）付近に垂直に布積みした4個の川原石の前後に斜方向の石積み（斜め目地）が確認できた。この観察から側壁の構築順序は、以下のように復元できる。

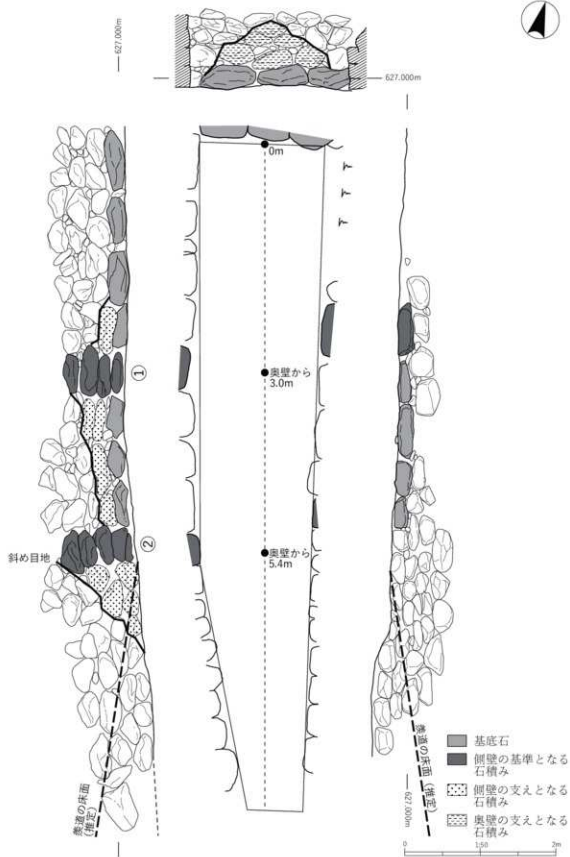
順序1 底石を配置した後に、①・②の石積み（側壁の基準となる石積み）と支える斜方向の石積み（側壁の支えとなる石積み）をする。

順序2 ①から奥壁方向に、奥壁から①方向に小口積みをする。

順序3 ②の石積みから①方向へ石積みをして玄室を構築する。

順序4 玄室構築後に、②から開口方向へ基底石を配置し、大形の川原石を小口積みして羨道をつくる。

東側壁は破壊が著しく、石積みの様子は明確でなかったが、玄室を構築する基底石は一様に扁平で横面を正面とし、羨道の基底に使われた石はその半分程度の短辺となる川原石の小面を正面に緻密な配置であった。羨道の東西側壁は、西に比べて東側壁の方が中形の川原石を用いて、丁寧に石積みされていた。羨道側壁の積み石が、玄室の床面より深く配置されていた理由については、石積みすることで羨道壁を、より強固にして土盛りを安定させる目的であったか、段丘崖立地を利用した横穴墓を模倣したか、



第14図 石積み構造図

段丘浸食によって礫が沈み込んだのかは明確でない。段丘崖に立地する工夫であったと考えている。

本古墳の石室構築には、裏込めと控え積みのための礫が用いられていなかったことから、石室周辺の盛土と同時進行で積み石が行われていたと判断した。第V層を玄室プランに合わせて掘り込み、川原石を基底に配置し地盤を固めた後に、石積みと数cm大の小石を混入したロームと粘土による裏込めをしながら、石室と墳丘が同時に構築されていったと推測できる。

平面プランは、東側壁が南開口方向に直線的に延びるのに対し、西側壁は玄門から約10°東方向に曲がり、開口部を狭める形状となっている。残存する開口部の幅は0.88mであり、平面プランは西側壁を狭めた台形になっている。本古墳は、南段丘崖に入口を設定すべく奥壁を決め、東に傾斜した地形を考慮して東側壁を直線にとるという地形に合わせたプランが設定されている。

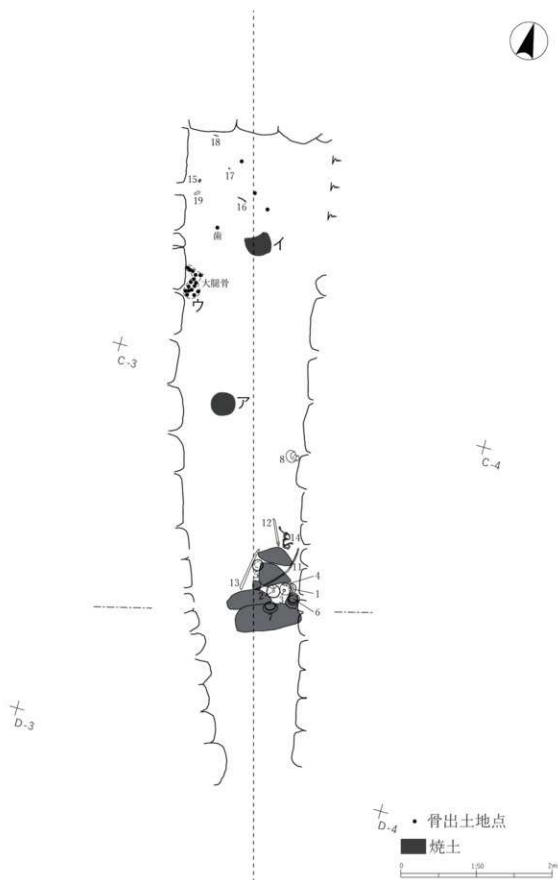
(3) 遺物出土状況

直刀3振、鉄鎌2点、馬具数点、須恵器10点が出土した。直刀と須恵器坏蓋、坏は玄室入り口付近からの一括出土であった。この他に、骨片の集中箇所と焼土集中箇所が各2箇所で見出された。装身具、装飾品類は出土していないが、床面上の覆土の洗浄抽出ができなかったため見落としている可能性もある。

検出面となる第Ⅲ層内からは、近代の瓦片、陶器の小破片と須恵器片等の数点が出土し、石室内から9点の須恵器が出土した。須恵器は、出土層位とレベルから本古墳存続時の遺物と判断した。9点のうち、完存する坏蓋と坏7点は全て玄室入口東壁付近の大小礫群直下の床面から一括出土した(第15・16・17図)。坏蓋は3点出土し、いずれも柄杓部が上になるように検出された。坏蓋1と坏蓋3は、坏4を間に挟み込むように重ねられた状態で検出され、この3点に接するように坏蓋2が西側から、さらに南側には高台を上、伏せた状態で置かれた坏6・7の2点が長径1.0mの大形礫(閉塞石か)の下から出土した。6点の須恵器の西側からは直刀の脇に受け部を上にした坏5が検出された。この遺物集中地点から北に1.8mほど離れた東壁の最下部から平瓶8が、口縁部を上にして東壁に寄りかかる状態で検出された。いずれの須恵器も欠損が極めて少なく、床面からの出土であることから埋葬・閉塞時に安置された状況とさほど変わっていないと判断した。短頸壺9は、羨道の崩落礫群下層から礫とともに出土した。

直刀3振と轡1点は、須恵器坏蓋7点の一群とはほぼ同一の土層・レベルから出土した。直刀11は、切先を南西方向に向け、複数の大形礫の下敷きとなって検出された。轡の一部は欠損し、出土時の形状は、礫の加重と遺物取り上げ時の礫除去の負荷により大きく弯曲していた。一方、直刀12・13は、切先が奥壁方向に向き、直刀12は北西方向、直刀13は北方向と別々であった。直刀12は、鏝を付したままの完形で、直刀13は茎を含めた2分の1以上が大きく欠損して出土した。礫下からは破損部が見つからなかった。破損した直刀2振は、坏類とともに追葬・閉塞時に、切先を北に向けて再安置された可能性がある。直刀12の東側から轡14が、銜を伸ばし、引手と鏡板が左右に分かれるように広がった状態で検出された(第16図)。遺存状況は良好で、銜、鏡板、引手の繋ぎ目が擦り減った状況も観察され、使い込まれた轡であった。

玄室入り口部の一括遺物とは対照的に、玄室の北西奥壁付近から、鉄鎌の一部と馬具と思われる金具片が散在して出土した。鉄鎌16・17は、1次堆積層上面の崩落礫群中から出土し、その他の金属類は、

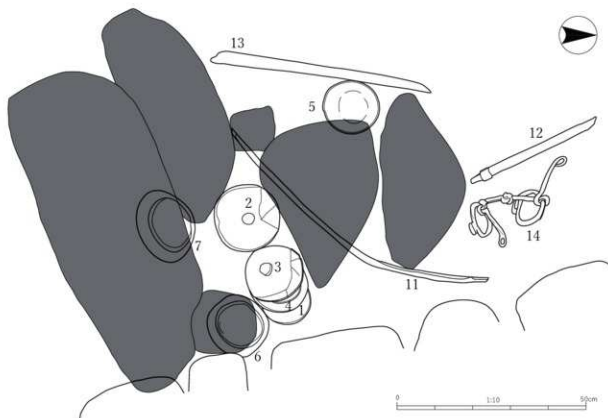


第15図 遺物出土状況1

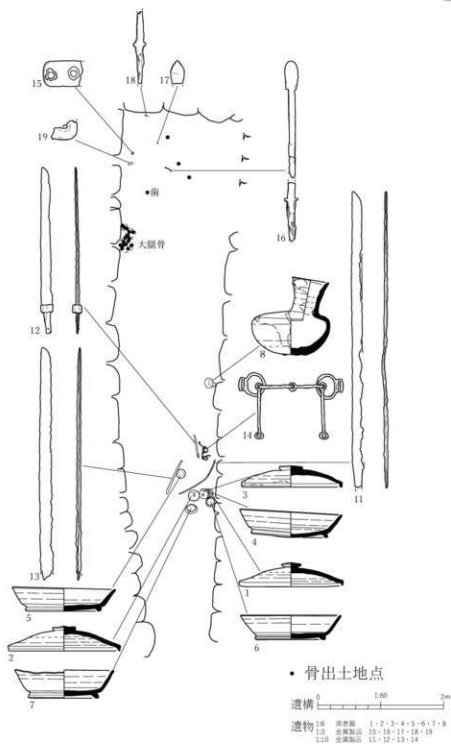
中小礫群下層から床面にかけての出土であった。鉄鏃と確認できたものは3点（16～18）で、玄室の奥中央部に位置しているが、配置にまとまりがなく直刀と隔てた位置にあることなどからは埋葬以後に人為的な移動があったことが示唆された。器種判別の難しい金属片は、鉄の小破片で複数あるが、形状が確認できたものは10点（19～28）程度である。すべて北西壁付近の崩落した小礫下の床面からかたまって出土した。形状が確認できたものは、^{ひょう}鉄の痕跡がある^{とく}留金具（19）、^あ鉸具（20・21）、^{あず}鎗（22～25）等馬具に関係する金具類であった。出土金属類の中には調査時に、鉄鏃・^し鞍と認識されていたものがあったが、錆が進み金属保存処理後の観察からは形状確認ができないものが数点あった。また、玄室奥から土器は出土しなかった。

焼土は、玄室中央部（ア地点）と奥壁付近（イ地点）の2箇所検出された（第15図）。径約30cmに広がる焼土の塊で、2箇所とも床面から20～25cm程度上面の2次堆積土からの検出であった。イ地点では、側壁の1次崩落後の小礫群の堆積土層上面から検出され、更に2次崩落の礫が焼土上に崩れ落ちている状況であった。出土遺物は、床面レベルの1次堆積土層内からの出土であることから焼土跡は、本古墳の東側壁が崩落した以後の痕跡であり、埋葬時とかかわりのないものであると判断した。

骨片は、いずれも人骨片と思われ、玄室中央の西壁付近（ウ地点）の集中箇所と更に玄室奥に散在して検出された（第15図）。検出層位は、小礫群下の床面レベル上からで1次崩落以前の遺物と判断した。ウ地点では、大腿骨と思われる大形の骨とともに多数の骨片が出土し、中央地点では、土に付着した骨の痕跡とともに歯が1点出土した。これらの骨類は、検出状況からみて古墳の被葬者と考えられる。



第16図 遺物出土状況2



第17図 遺物出土分布

第6章 遺物

出土遺物は、近代の磁器片・瓦片、金属製品の小破片以外はすべて図化・掲載した。

1 須恵器

土器類は、すべて須恵器で10点が出土した（第18図）。坏蓋3点、高台坏4点、平瓶1点、小壺1点、甕1点である。蓋、坏、平瓶の遺存状態は良く、小壺と甕は破片である。

3点出土した坏蓋1～3のうち、2・3は口縁部の一部を欠損するが、いずれも完形である。外形は天井部から丸みをもって緩やかに口縁部に至り、1・2は折り曲げられた口唇部が尖り気味に外に反る器形で、ロクロ成形された後、外面上部ヘラ削りしやや尖った扁平な宝珠形つまみが付けられている。胎土は密で、3～4mm大の白色礫・白色粒が多く混入し、焼成は良好で、色調は黄灰色・暗灰色である。3は口唇部が丸く内側に入る器形で、ロクロ成形の後、外面にロクロナデを施す。全面に自然軸が残され、宝珠は扁平に潰れている。3の形状は、1・2に比べて天井部が丸くふくらむ。胎土は精選された緻密な粒子で、白色粒が混入する。焼成は良好で、色調は灰色であり在地のものと同様である。

高台坏4～7は、完形で4点出土した。体部にやや丸みを帯びて、口縁部が開き気味に立ち上がる器形である。ロクロ成形で、底部は回転ヘラ削り後に高台を貼り付け、ロクロナデが施されている。内外面ともにナデ調整となる。4は、底部が膨らみをもち、高台より低い底面となるため安定しない。5には、高台部に布圧痕が残り、底部内面には指で押さえた凹みがある。また、2箇所に焼成時の亀裂がある。6は、高台底面が潰れて接地面が平坦となっている。7は、口縁平面形が楕円形状で、側面が波状に歪んでいる。4点とも胎土中に、砂礫・白色粒子が多量に混入している。いずれも焼成は良好で、色調は灰色となる。

平瓶8が、1点完形で出土した。ロクロ成形による扁平球体に頸部を約11°傾斜させて嵌入している。頸部長は体部高に比して長く、口縁部近くで外反する器形で、頸部内外面及び胴部外面には自然軸が広くかかっている。球体の体部上面には球体接合の稜線が残り、底面から体部下半は回転ヘラ削り、頸部及び胴部上半には回転ナデ調整が施されている。頸部内面と底面には焼成時の粘土付着がある。胎土は、白色粒が混入し精選されている。焼成も良好で、色調は灰色である。

小壺9は、胴部約3分の1の破片である。口唇部が僅かに削れている。最大径が上部でやや潰れ、口縁が小さく外反する短頸壺である。胴部下半は回転ヘラ削り、肩部から口縁はロクロナデが施され、内面はロクロナデである。胎土は密で、白色粒を少量混入する。焼成は良好で、灰色の色調である。

甕10は、検出面から出土した。胴肩部から頸部に至る破片である。胴部外面は平行叩き後、回転ナデによって擦り消し、頸部も回転ナデ調整が施される。内面は叩きに伴う同心円文のあて具の重複文様（青海波）が残る。胎土は密で砂礫、砂粒、白色粒を多量に混入し、焼成は良好で、黒みがかった灰色の色調である。

坏蓋3点は、内面にかえりのない、口縁端部を折り曲げた形状で、口径は16cm以上と大形であり、

つまみ部の形状も大きく扁平となる。この坏蓋に対応する4点の坏も口径が15.65～16.4cmと坏Bの法量では比較的大形となる。いずれの器形も高台が「ハ」の字に開き気味で底径が大きく、口縁部が直線的に開く逆台形となっているが、高台端部の接地部形態は多様で、坏4・5は、底面が高台底面よりとびだす形態となっている。これらは8世紀前葉に位置付けられる。

平瓶は中形のやや扁平となり丸みを残した形態、小壺は口縁部が体部に比べて小さくなる形態であることから7世紀後半～8世紀前葉の須恵器である。なお、坏蓋3と平瓶8は精選された胎土と精緻な成形から、東海地方西部からの搬入品と判断した。

2 金属製品

金属製品は鉄製の武器と馬具が出土した(第19～21図)。武器は直刀3点、鉄鎌3点、馬具は轡1点、留金具2点、鉸具2点、鎧鉾破片等である。直刀11～13は、玄室入り口の北側約80cmの範囲内から轡、須恵器とともに出土した。直刀11は、全体的に錆による劣化が著しく刃先の大半と茎の尻部分を欠損し、厚みも減じているが、棟形状は原形をとどめている。全長78.0cm、刃長が72.5cm、刃部最大幅は3.0cmである。刃区は斜めで明瞭に確認されたが、棟区は不明瞭であり片側の可能性が高い。茎の厚みは0.7cm、残存部に目釘穴はない。直刀12は、錆による膨張と刃部の一部が欠損し、茎から切先までやや左に弯曲しているが、幅2.0cmの鏝と茎に目釘を残し、遺存状況は良好である。刃区と棟区については、鏝に隠れたため、X線撮影でも不明である。全長44cm、刀長36.5cm、茎7.5cm、刃幅最大3.0cmである。直刀13は、錆による膨張があり、茎部は欠損し、切先から刃部の2分の1程度が残る。残存長は61.3cm、最大幅は3.4cm、棟部厚みは1.1cmと大形の直刀である。

鉄鎌16～18は、鎌身部2点と茎部1点の欠損品計3点が出土した。いずれも玄室奥壁付近から1次崩落礫と混在して検出され、16は遺物取り上げ後に折損し、17・18は別々の場所で見つかったが、いずれも錆が著しい。検出状況から副葬以後に人為的な移動があったと推測された。16の鎌身は両刃造で、角間となり、頸部の断面形は方形を呈し堅固な造りである。平面形状が長三角もしくはスプーン形の両刃式長頸鎌で、接点を欠損した頸部間は棘状間である。17は、錆による膨張が著しく鎌身先端のみであるため両刃式以外は不明である。18は、頸・茎部の一部で、鎌身側部を欠損する。頸部断面は長方形を呈し、間は棘状間である。また、16・18の茎部にはともに木質が付着している。17・18は、破片資料で形状は不明であるが、鎌身、茎の形や断面形、法量ともに16と類似することから、3点ともに同一形態の両刃式長頸鎌と思われる。出土鉄鎌は、古墳時代後期の範疇に属するものである。

轡14は、素環鏡板付轡である。銜が伸び、左の引手が広げられ、右の引手が捻じれた状態で広がって検出された。片方の鏡面の一部が欠損するが、形状は保たれて、個々の金具の遺存状態は良好である。また、銜と鏡板の擦れによる摩擦が顕著に観察され、頻繁に使用された轡であったことが推測された。鏡板は、断面円形の鉄棒を環状に丸め、体部に長方形の立間が鍛造接合されている。鏡板の大きさは6.6×5.5cmの楕円形、立間は、3.3×2.1cmの長方形である。銜は直柄銜で、両端環は外径2.5cmの円形、連結環は外径2.1cmであり、両端環の径の方が大きい。引手は、銜との連結する環は径2.0cmの円形、

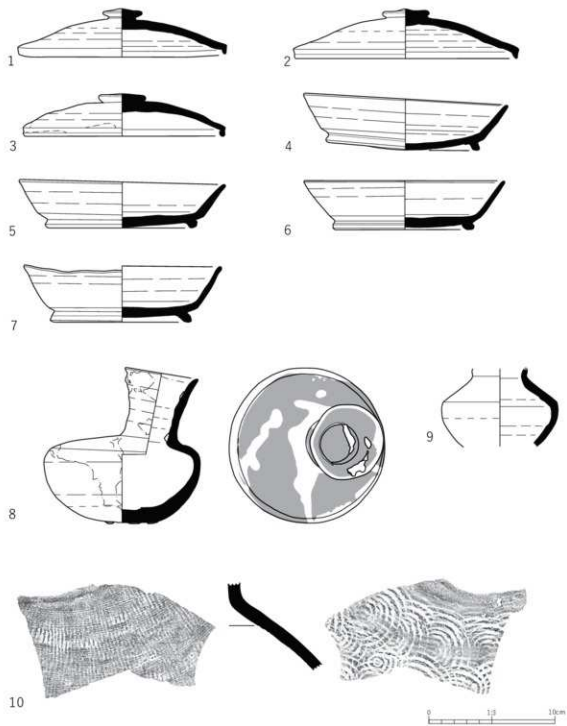
引き手壺は、2.3×2.0cmの楕円形で、左、右とも約30～35°外側に曲げられている。素環鏡板付轡は、古墳時代後期～奈良時代にみられる形態である。本轡は、7世紀代の資料と判断した。

馬具の一部となる鉄製品は、奥壁付近の床面上20cmの範囲からの出土で錆による膨張と変形が著しい。留金具15は、幅2cmの隅丸長方形で一部が欠損するが、辻金具の一部とも考えられる。2箇所に長さ1.2cmの丸鋸が打たれている。19も同形の留金具と思われ、丸鋸の痕跡として孔が観察された。20・21は、残存する形状がコの字型となる同一の金具である。同一個体とも思われるが接点はない。断面方形で、両端が内側に湾曲する丸みのある長方形に復元されることから鉸具とした。22～25は、断面隅丸方形の棒状の鉄を丸く曲げた金具で、小破片となって複数出土し、鞍として取り上げた。錆が著しく原形への復元は難しいが、細長く復元できそうで、捻じれが観察されることから鐙轡とした。26～28は、不明鉄製品である。26は、厚み0.65cmで、一部に木質が付着した製品である。両端を欠損しているが、刀子の可能性もある。27は、厚み0.45cmの断面長方形で片側が曲がった形状である。28は、当初鉄製の破片として取り上げた鉄製品であるが、保存処理によって厚さ0.3cmの薄い板状の鉄片が重なったものであると判断した。

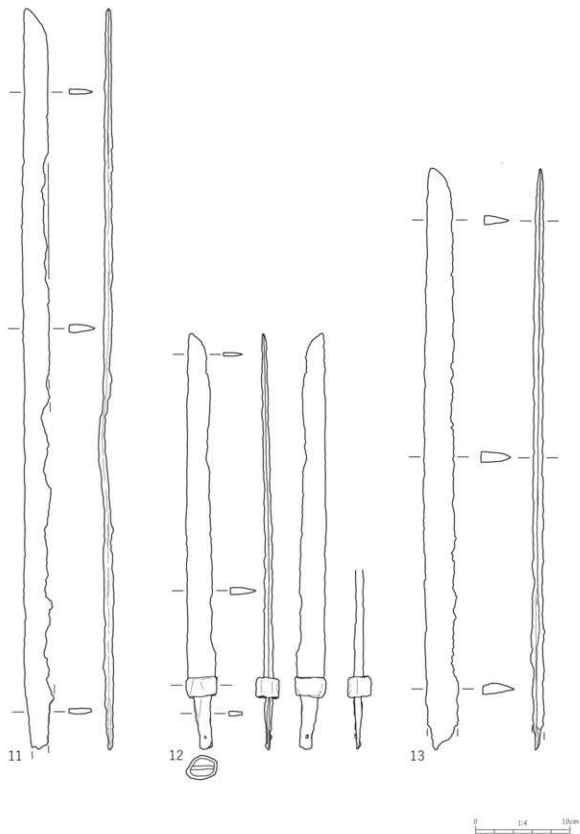
3 個人所蔵表採遺物

今回の発掘調査と整理を進める中で、地域の方々から本古墳にかかわる情報をいくつかお聞きすることができた。その中には「浜場地籍には古墳と思われる小丘がいくつかあり、周辺から須恵器が多数、金環、玉類等が出土した」「浜場塚及び周辺から出土した遺物を長年保管している」等があった。造成工事の折には本古墳以外に古墳の痕跡は検出されなかったが、出土資料として、地権者の方が6点の遺物を所有されていた。そこで、地権者の許諾を得て本誌に掲載することとした（第22図）。

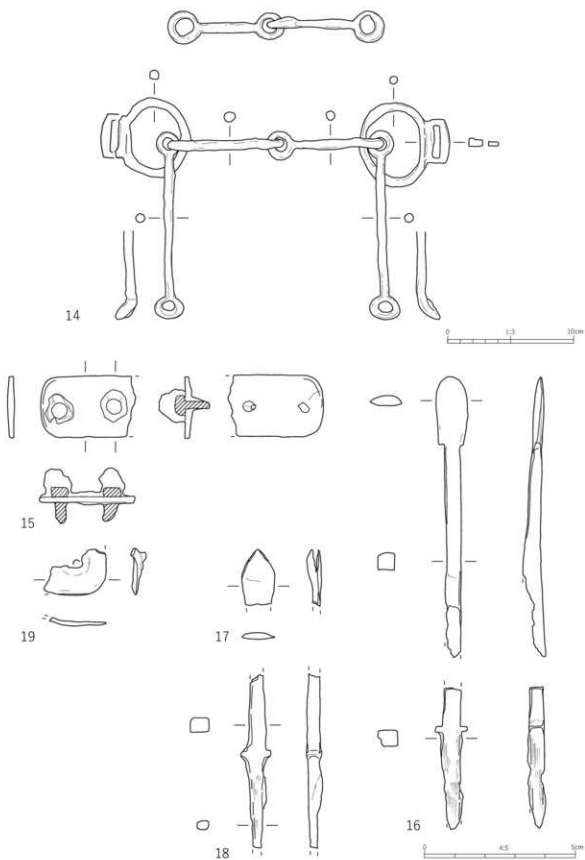
出土資料は、金環（29）、銀環（30）、馬具（31）、飾金具（32）、有孔石製円盤（33）、珠状耳飾（34）である。このうち本古墳とかかわりがあると推測される遺物は、金環、銀環、馬具、飾金具の4点である。金環は、穂高古墳群のA6・A8・B23・E6・E7・G1号墳と祖父が塚（松川村）の計7基の古墳で確認されている。一方、本古墳群から銀環の出土はない。31は、輪状の平面形状と扁平な断面形状の大きさから引手と鏡板を連結する轡の一部と判断した。32は、径0.35cmの断面円形の輪状の金具である。馬具、装身具の飾金具の一部と判断した。33の有孔石製円盤、34の珠状耳飾については、本古墳周辺から縄文時代前期～後期の土器・石器の出土が報告されていることから、縄文時代に帰属する遺物として捉えた。



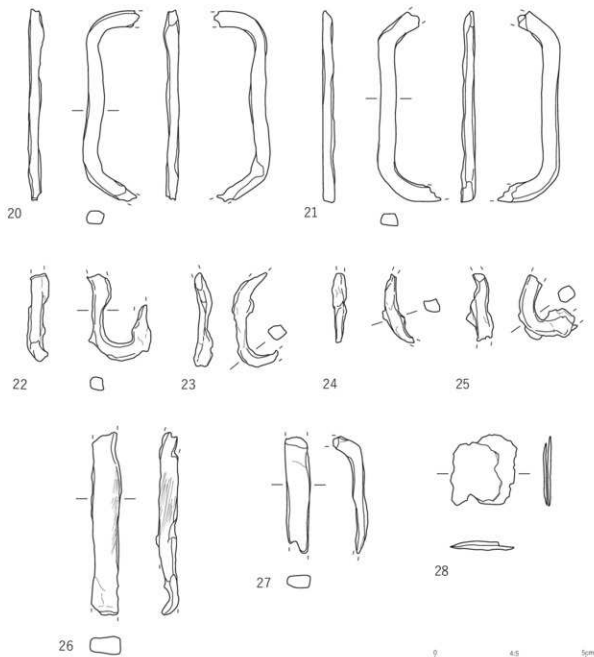
第18図 須恵器



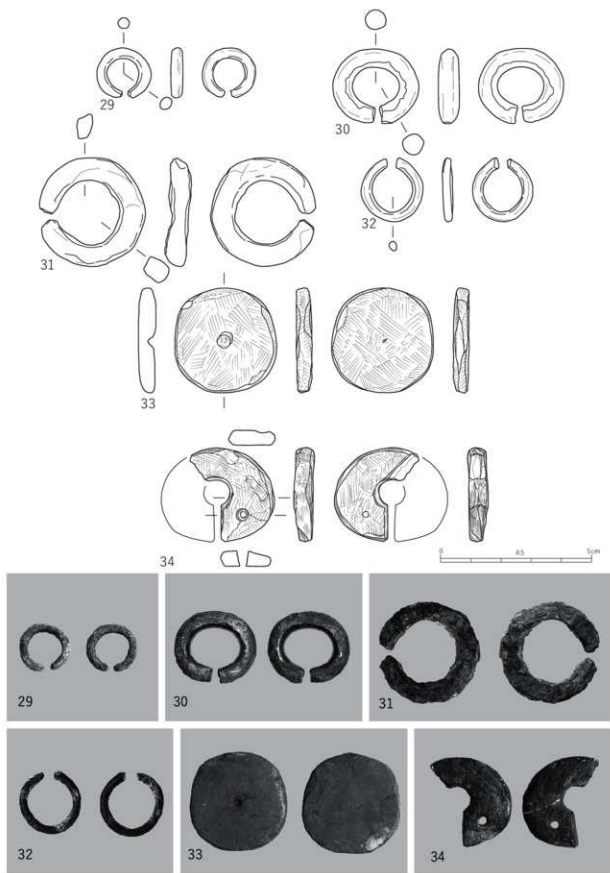
第19圖 金屬製品 1



第20図 金属製品2



第21圖 金屬製品3



第22図 個人所蔵表探遺物

第5表 須恵器観察表

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
1	須恵器	坏蓋	玄室一括 No.13	3.70/3.0(天井部)	16.55	—
	色調(土色帖)	胎土		外面調整	内面調整	
	黄灰色(2.5Y 4/1)	白色礫・白色粒多量混入		上部回転ヘラ削り、 ロクロナデ	ロクロナデ	
	残存度	備考				
	完存	自然釉				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
2	須恵器	坏蓋	玄室一括 No.10	3.95/3.2(天井部)	17.90	—
	色調(土色帖)	胎土		外面調整	内面調整	
	暗灰色(N 3/1) (2.5Y 4/1)	3~4mm 大白色礫・ 白色粒多量混入		上部回転ヘラ削り、 ロクロナデ	ロクロナデ	
	残存度	備考				
	完存	自然釉				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
3	須恵器	坏蓋	玄室一括 No.11	3.35/2.8(天井部)	16.00	—
	色調(土色帖)	胎土		外面調整	内面調整	
	灰色(7.5Y 5/1)	白色粒混入、精緻		ロクロナデ	ロクロナデ、指圧痕	
	残存度	備考				
	完存	自然釉 2/3、焼成良好で胎土精緻、搬入品か				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
4	須恵器	坏	玄室一括 No.12	4.5	16.25	12.20
	色調(土色帖)	胎土		外面調整	内面調整	
	灰色(7.5Y 5/1)	砂礫(白色礫、2mm 大 チャート他)混入		ロクロナデ、 底面回転ヘラ削り	ロクロナデ	
	残存度	備考				
	完存	坏底部が高台より深い、器形の歪み顕著				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
5	須恵器	坏	玄室一括 No.4	3.85	16.40	12.05
	色調(土色帖)	胎土		外面調整	内面調整	
	灰色(N 5/1)	白色粒子多量混入		ロクロナデ、底面回転ヘラ 削り、高台部に布目圧痕	ロクロナデ	
	残存度	備考				
	完存					

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
6	須恵器	坏	玄室一括	39	15.95	11.20
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
	灰色(5Y5/1)	砂礫混入 白色粒多量含む	ロクロナデ 底面回転ヘラ削り	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	完存	歪み大きい、底部高台より坏底面の影らみが顕著で不安定となる				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
7	須恵器	坏	玄室一括	4.55	15.65	11.20
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
	灰色(10Y5/1)	白色粒混入	ロクロナデ 底面回転ヘラ削り	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	完存	口縁、高台の歪み顕著				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
8	須恵器	平瓶	玄室東壁	12.3/頸部長4.7	5.90	5.20
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
	灰色(7.5Y7/1)	白色粒混入、精緻	回転ナデ、底面～体部下 回転ヘラ削り	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	完存	頸部内外面と胴部上面に自然釉、胎土精緻、搬入品か				

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
9	須恵器	小壺	羨道礫覆土内	不明	4.20	不明
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
	灰色(7.5Y5/1)	白色粒少量混入緻密	回転ヘラ削り	ロクロナデ		
	残存度	備考				
	胴部1/3					

No.	種別	器種	出土番号(注記)	器高(cm)	口縁径(cm)	底径(cm)
10	須恵器	甕	検出面(Ⅲ層内)	不明	不明	不明
	色調(土色帖)	胎土	外面調整	内面調整		
	灰色(7.5Y5/2)	白色粒混入	叩き目→回転ナデ	頸部ナデ、胴部当具痕		
	残存度	備考				
	胴上部破片					

第6表 金属製品観察表

No.	器種	出土位置	重量 (g)	残存長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考 (保存処理後の所見等)
11	直刀	玄室	346.4	78.0	2.6~3.0	0.8~0.55	茎部欠損、曲がりあり、錆による欠損顕著
12	直刀	玄室	234.9	44.0	2.0~3.0	0.4~1.0	切先が左にやや湾曲、鏃と茎部に目釘が残存
13	直刀	玄室	486.9	61.3	3.4	0.9~1.1	茎部欠損、錆による膨張
14	馬具轡	玄室	173.4	銜17.1 引手14.7	鏡板6.6×5.6	0.7	素環状蓋板付轡、完存
15	留金具	玄室	7.4	3.2	2.0	0.18~0.2	留釘2箇所、径0.4cm、長さ1.2cmの丸鉄、錆による膨張
16	鉄鍔 (鍔身)	玄室	4.9	4.0	鍔身幅1.05	鍔身厚0.3	茎部欠損、茎に木質部残存付着、錆による膨張顕著
	鉄鍔 (茎)	玄室	2.9	2.7	0.7	0.6	同一個体取り上げ後に折損
17	鉄鍔 (鍔身)	玄室	0.6	1.8	1.15	0.35	錆による膨張顕著
18	鉄鍔 (茎)	玄室	2.6	5.7	0.60	0.45	欠損するが、木質部残存付着
19	留金具	玄室	1.3	2.1	1.5	0.2	歪み著しい、丸鉄の痕跡あり
20	鉸具か	玄室	3.2	6.3	0.4~0.5	0.35~0.4	21と同一の形状、同一個体か
21	鉸具か	玄室	3.2	6.3	0.4~0.55	0.35~0.4	20と同一の形状、同一個体か
22	鍔粗か	玄室奥	3.3	2.3	0.45	—	22~27は同一出土、調査時較として取り上げられた断面形隅丸四角、楕円で弯曲する形状の金具であるこの他に小破片が複数ある形状から鍔粗とした
23	鍔粗か	玄室奥	2.7	2.6	0.45~0.55	—	
24	鍔粗か	玄室奥	1.0	2.6	0.4~0.5	—	
25	鍔粗か	玄室奥	2.2	3.1	0.50~0.55	—	
26	不明	玄室奥	5.7	6.1	1.05	0.65	木質部残存付着、刀子の一部か
27	不明	玄室奥	2.9	3.8	0.8	0.45	馬具の一部か
28	不明	玄室奥	1.7	2.3	2.20	0.30	調査時鉄鍔として取り上げられた、2枚の薄い鉄板が重なる

第7表 個人所蔵表採遺物観察表

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
29	金環	3.2	1.85×1.6横に影らむ楕円形	0.5×0.35の楕円断面	0.45	銅
	備考 金箔、表面の摩滅著しい					

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
30	銀環	15.6	2.9×2.5横に影らむ楕円形	0.8×0.65の楕円断面	0.65	銅
	備考 銀箔、銀箔は内面のみ残存、表面の摩滅著しい					

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
31	馬具 (轡の一部)	15.9	外径3.6の円形	0.9×0.75の隅丸方形の断面	0.7	鉄
	備考 銜と鏡板、引手と鏡板を連結する轡の一部					

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
32	飾金具	2.0	外径2.1の円形	径0.35の断面円形	0.2	鉄
	備考 装身具・武具・馬具などの飾金具の一部か					

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
33	石製円盤	5.4	縦3.5、幅3.5のはば円形	中央円孔径0.45	0.6	砂岩
	備考 紡錘車未成品もしくは製品、中央片面穿孔、裏面穿孔位置にわずかな点状の穿孔傷あり、表裏・側面の全面を研磨					

No.	器種	重量 (g)	平面形状 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材
34	塊状耳飾	10.7	縦3.1、幅推定3.7の楕円形	中央円孔径0.8	0.55	滑石
	備考 右下小孔を穿孔した後で面的研磨を施したと考えられる、片面穿孔 (径0.2cm)、表裏・側面全面を研磨					

第7章 調査の総括

1 横穴式石室の構築

E13号墳は、標高627mの南東に傾斜する斜面に立地していた。字名を「浜場」と称するこの地は、周辺の地形に比べると平坦の多い緩斜面であるが、隣接する水田の段差は80～150cmに及び、段丘崖に接する場所である。近世以来の耕作地開発により墳丘、石室の多くを失ったが、トレンチ調査と平面精査によって古墳築造の一端を知る手がかりをつかめた。以下、構築工程を復元してみたい（第23図）。

第Ⅰ工程 西側斜面を広範囲に掘削し平坦面をつくりだす。掘削した土で東側斜面を盛り、墳丘プランを創出する。この工程で、玄室の長方形プラン（約5.7×1.8m）を第Ⅴ層（小礫を含む黄褐色ローム層）に掘り込み、基底とする川原石の選択と組み込む位置を設定する。東側壁は第Ⅴ層までの掘り込みを深くし床面とともに黄褐色ロームで締める（1・2）。

第Ⅱ工程 奥壁から側面を内に向けた基底石を配置し、「コ」字状の玄室をつくる。西壁より東壁を強固にするため玄室には規格の整った大形扁平川原石、東側ラインの羨道部分には中形の礫を用いる。基底石配置後に奥壁を小口積みに3段積み、側壁の基準となる位置をきめて4段程度の垂直平積みとそれを支える階段状の小口積みをする。側壁の積み上げ構築をするにあたっては、黄褐色ロームを混入した粘土を裏込めとして固める（3・4）。

第Ⅲ工程 玄室内面を補強しながら小口積み、持ち送りに川原石を積み上げる。羨道は中形の石から大形の石に小口積みで積み上げる。開口を狭くするため羨道部西壁を東側にカーブさせ積み上げる（5）。

第Ⅳ工程 天井石を奥壁から上げ封土していく。羨道部は入り口から土を盛り、玄室への傾斜を作りだしながら開口部を狭くする。羨道に封土し、墳丘を整える（6）。

本古墳石室の特徴は、①石室のプランは、東壁のラインを直線軸にして構築されていること。②第Ⅴ層を掘削して平坦面を作り出し、地下に石室を構築すること。③全て扁平な川原石を用いて平積み、小口積みすること。④裏込め、控え積みに石を用いないこと。⑤羨道部の掘方、側壁が深く、低位になることである。

①については、自然巨石を東側壁に利用したB1号墳（ちいが塚）とA1号墳（陵塚）も、東壁のラインが直線となる（第24図）。東傾斜による地形のため、石室保護という制約が働いたものと考えられる。

②・③については桐原健が「墳丘を重視する意識の希薄さ、石室構造技術の進歩向上」と捉え「省力化古墳」とした構築方法でもある（桐原1992）。ただ、築造にあたっては、氏族集団による立地や石室・墳丘規模に対してある程度の規制（意図）があったことから、一定の形態を踏襲し、地理的条件に合致させた強固な構造といえる。石材選択は、烏川に隣接する立地から身近な石材を効率よく利用した結果である。④の裏込めについては、中小礫が検出されておらず粘土で固めたことは確かであるが、畦畔と段丘崖斜面の広範囲に散乱していた礫の状況を見ると、控え積みや封土外護の列石がなかったとは言い切れない。⑤については羨道の拡張や修復、開口部が段丘崖ということが考慮されたものとして捉えた。

第I工程 1 築造地の選択・墳丘プランの伏拝整地

群内の古墳の位置、河川・冠蓋原との距離等の制限、石材獲得のしやすさによって立地が決まる。



- 2 西側斜面の掘削整地と
玄室プランの地山までの掘削と版築整地
墳丘プランの外形に沿って高溝の掘削、
列石等が配置された可能性がある。



第II工程 3 石室の構築

奥壁から側壁に基礎となる石を配置し、
奥壁から側壁に小口積みで、
3段階積み上げる。
基礎部は大形扁平の川原石を用いて、
長径を軸線に沿って平積みし、
側壁を小口積みしていく。



4 石室と墳丘の構築

側壁裏込めと、墳丘の版築には、
ロームを用いて、石室を構築していく。
羨道など石室内の埋め戻しをしながら
構築した可能性もある。



第III工程 5 玄室・羨道側壁の構築

側壁上段まで粘土による裏込め、
控え積みをして玄室を構築し、
羨道まで石積みをする。



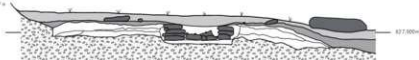
第IV工程 6 墳丘の構築

天井石を奥壁から上げ封土し、
内積の形状を整える。
8世紀前半に閉塞し、
古墳の役割を終える。



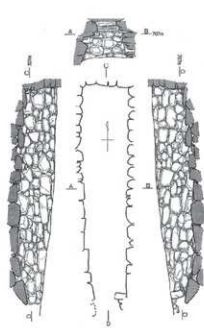
崩壊後 7 石室閉塞後

天井石・側壁崩落、
盗掘を経て耕作地となる。

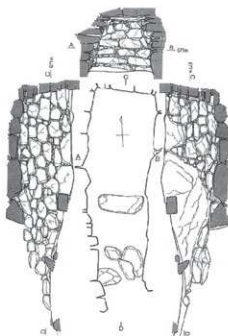


0 1:160 2m

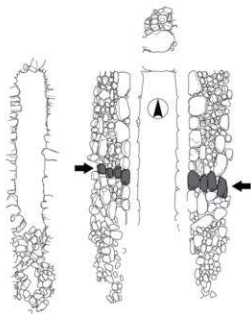
第23図 石室築造模式図



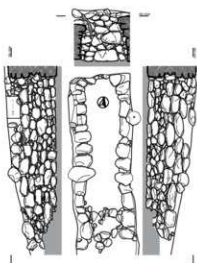
1 A1号墳(陵塚)石室



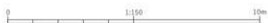
2 B1号墳(ぢいぶ塚)石室



3 G1号墳(上原古墳)石室



4 F9号墳(二つ塚古墳)石室



第24図 穂高古墳群の石室

(1・2 (穂高町誌編纂委1991a)、3 (安曇野市教委2015)、4 (國學院大學文学部考古学研究室提供))

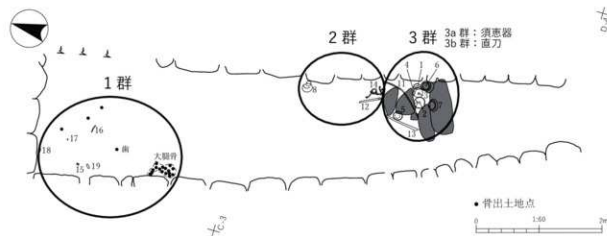
2 出土遺物にみる稼働期と終焉期の分析と課題

石室内出土の遺物と状況から本古墳の築造、稼働時期を考察する。出土遺物は、坏類を主体とする須恵器と武具・馬具の金属製品、骨であり、この限られた資料の検出状況と特徴を整理してみたい。出土地点は、北西側・奥壁周辺（1群）と玄室中央東側壁周辺（2群）、玄門周辺（3群）の3つの群として捉えた（第25図）。これらの遺物位置と遺存状況（破損等）から石室内で3・4回の人為的な活動を推測できる。

玄室奥の1群は、鉄鎌、留金具、鎧鉤などの馬具の破片と人骨で、須恵器はない。この1群を古墳築造、埋葬の段階とした。鉄鎌は接合資料を含め破片で4点出土している。錆による膨張や剥離によって微妙な形状は観察できないが、鎌身は直角間の長三角形となり、頸部が軸状間となる長頸鎌柳葉式である。馬具は、留金具2点と棒状鉄の連結した固まりとして取り上げた弯曲形状の破片（鎧鉤とした）が複数ある。いずれも形態を確認するまでには至らなかった。鉄鎌の型式とD1号墳（魏石鬼窟）から類似する留金具が出土していることから7世紀前半を上限とする時期を考え、この段階を7世紀中頃とした。

玄室中央の2群は、平瓶8、轡14と全長44cmの鍔を付した直刀12で、いずれもほぼ完存する遺物である。中小礫と埋土から検出された3点の周辺からは関連する付属品や破片の散乱はなく、それぞれが単独で据え置かれた状況であった。この一群を追葬段階とした。平瓶8は、口縁・頸部を上にして東側壁に寄りかかる状態で検出された。自然釉が頸部全面と体部の上半部に残る平瓶は、灰色で緻密な胎土と堅緻な焼成から東海地方西部（猿投系）からの搬入品と判断した。頸部は、体部の2分の1程度と長く、口縁端部がやや開き気味に尖る形状であり、体部は丸みをもった扁平形状であるが、肩部の稜線は明瞭でなく緩やかな丸みを持っている。これらの特徴から猿投編年Ⅲ-3期に比定される（愛知県史編さん委2015）。直刀12は鍔を残し刃長が36cmと小中形である。鍔の癒着によって茎の形状が明瞭にわからないが、刃区・棟区が観察された。

本古墳群出土の直刀は、11基から出土記録がある。現存する直刀は、A6号墳（犬飼塚）1振、C2号墳1振、E6号墳（狐塚3号墳）8振（第28図）、F9号墳（二つ塚）1振、G1号墳（上原古墳）1振、古墳は限定できないが有明古墳群出土とされる3振と本址3振りを含めると合計18振が確認できる。直



第25図 出土遺物群区分図

刀12は、出土資料のうち最小で、出土資料の中では最小であり実用的な長さといえる。髷は、大形矩形立開環状鏡板付髷で、古墳時代後期～奈良時代の時間幅がある通用の型式で、本古墳群も含め、県内で多くの類例がある。出土した髷14は、銜の長さ17.1cm、引手の長さ14.7cmと比較的小さく、使用痕による金属の擦り減りが明瞭に観察された。銜の両端環が連結環の径よりやや大きく、楕円形状の鏡板の長径6.6cmに対し鍛造接合した立開の長さが2分の1となる。髷14は7世紀代の馬具と判断し、平版8とあわせてこの段階を7世紀後半とした。

玄門周辺出土の3群は、須恵器の坏蓋と坏身・直刀2振である。閉塞石周辺から出土した須恵器類を3a群、折損・形状変化の著しい直刀11・13を3b群に分けて検討する。

3a群須恵器の蓋坏・坏は、口径16cm前後の同一形態の高台坏4点と17cm前後の同一形態の坏蓋3点である。坏4～7は、底径が長く高台が「ハ」字に開き、不安定な内縁接地である。坏部器形は底面が低くへこみ断面逆台形の器形で歪みも著しい。坏蓋は口縁端部を折り曲げ、尖り気味の口唇部をまっすぐに作り出している。坏蓋1・2は、天井部に丸みを持つ器形で、宝珠摘みのくびれと突起も丁寧に作り出している。坏蓋3は天井部がやや低く宝珠摘みが扁平となる器形であり、器壁が薄く精緻な胎土で、自然釉が外面を覆っている。坏蓋3は東海地方西部（狼投系）からの搬入品と判断した。坏と蓋は、検出・残存状況から一括して埋納された現況を残した土器と認識され、この須恵器群を追葬最終もしくは石室閉塞段階とし、坏蓋3と6点の在産須恵器をふくめ7世紀末～8世紀前葉の時期とした。

3b群の直刀11は、茎の一部を欠損する全長78.0cm以上の大型の太刀で、石の下から刃部を上大きく弯曲した状態で検出した。直刀13は茎方向の2分の1が欠損する全長100cm以上に復元されそうな大形の太刀で、坏の口縁部の上部と接するように検出された。直刀11は棟区がなく刃区が斜めになる形態で、復元すると穂高古墳群中最も長い直刀になる。これら3b群の直刀は、隣接する3a群の須恵器が整然と置かれていた状況、破損の少ない残存状況と比較すると大きなギャップがある。この破損・劣化した直刀は、人為的に玄門近くに移動させたことが推測され、3a群とは時期・性格を異にする遺物と捉えた。断定はできないが、直刀の法量、形態も併せて、奥壁周辺出土の1群の鉄鏃、馬具等の金属器の段階に帰属する遺物とするのが妥当と考えた。これらの遺物は、初期の築造・埋納後から暫く時間を置き、追葬・閉塞段階で埋納しなおされたと解釈した。

本古墳の状況過程を次のように整理した。

第8表 遺物からみた経過

段階	時期	遺物（副葬・帰属品等）	遺物出土位置
I 築造・初期埋葬	7世紀中～後	馬具、鉄鏃、直刀、人骨、歯	玄室中央から奥西側壁、玄門
II 追葬	7世紀後～末	馬具、直刀、須恵器（平版）	玄室中央から南寄り東壁
III 追葬・閉塞	7世紀末～8世紀前	須恵器（坏蓋・坏）	玄門東側寄り
IV 牧・農耕地・盗掘	8世紀後半～	焼土、東側壁奥の崩落石	玄室中央と奥、東側壁崩落

本古墳の築造時期と最初の埋葬は7世紀中頃～後半とされ、追葬は7世紀末までであり、8世紀前葉で古墳が閉じられたと解釈した。遺物の出土地点と遺存状況を検討して経緯を3段階に分析したが、数少ない出土遺物から、金属製品と土器を尺度として同等に用いること、追葬・盗掘などで何度かの遺物移動があることを都合よく解釈していることに問題もある。これによって導きだされたII段階にある馬

具と平瓶、直刀の帰属については、異論もあるかと思われる。ここでは、1つの視点として穂高古墳群の埋葬経過には、初期に馬具と武具が副葬されること、後半に馬具副葬がない時期があること、8世紀前半の古墳終焉期（第8表第Ⅲ段階）には須恵器のみを用いた儀礼が行われ副葬されること等の各段階が、共通している可能性を提案したい。ただ、8世紀前半を古墳終焉期（第8表第Ⅲ段階）とした本古墳出土の須恵器には、坏蓋と坏のみと器種に偏りがあり、時間軸の細分と古墳集落遺跡の特定に課題を残している。明科地域や隣接市町村の最終段階の古墳出土遺物には、坏以外の壺、高坏等の多様な器種がある。本古墳から出土しなかった「かえりを持つ坏蓋（蓋坏A）」や「底面ヘラ・ナデ調整の無台の坏」と須恵器坏蓋Bと坏Bとの共伴関係を手掛かりに土器様相の細分を明確にする必要がある。また、現段階の発掘資料で本古墳のⅡ・Ⅲ段階に最も近い安曇野市内の集落遺跡は、明科遺跡群茶町遺跡と穂高神社境内遺跡となる。

3 穂高古墳群内の位置づけ

古墳の築造時期と継続期間について根拠となるものは、石室構造と出土遺物であるが、調査資料が少ない穂高古墳群では、立地（占地）と石室の規模・主軸方向等に注目した分析が行われている（第2章3）。分析結果として、「概ね墳丘・石室規模において優越的な古墳は、墓域の中で最も高い場所に占地している」とした松尾昌彦（岩崎ほか1983）・三木弘（三木2011）の論考以後は、穂高古墳群をこのイメージで捉えることが定着していた。この中であって國學院大学考古学研究室によるF9号墳の発掘調査が平成21年（2009）度から行われ、石室・遺物等を総合的に見直す機会となっている。調査をもとにした報告書の中で尾上周平は、墳丘と石室の規模について許容比率を見出し、規模と副葬品との相関関係を再整理した（深澤編2017）。この分析により本古墳群築造には統一的な規格が想定されること、金銅製の武具・馬具が副葬される古墳は墳径14.0m以上であることを指摘した。

これらの分析を踏まえて、E群の中での本古墳の位置について検討する。E群中で調査等の記録が残っている古墳は、E7号墳（狐塚2号墳）の石室と遺物、E6号墳（狐塚3号墳）の遺物のみであり、墳丘規模が確認できた古墳は13基、石室規模の確認できたものは4基である（第3表）。

本古墳の立地する標高は、E群中で最も低い約627mである。発掘調査の結果から推定墳丘径は12m余りで、E6号墳（狐塚3号墳）の19.8m、E7号墳（狐塚2号墳）の15.0m、E2号墳（三郎塚⁽²¹⁾）の14.0mに次いで4番目である。石室長が確認できた古墳は、E2号墳（三郎塚）の2.0m、E3号墳（十三屋敷西古墳）の5.0m、E7号墳（狐塚2号墳）の5.0mもしくは6.5mの3基であるが、E6号墳の墳丘規模が19.8×16.5mと古墳群最大級の墳墓となっており石室長もE群中最大と推定すると、本古墳の8.6mの石室は2番目と仮定できる。E13号墳は、規模においてE群の中で上位に位置付けられ、標高では烏川沿いに展開する最大古墳E6号墳より低位に位置する。

E群の遺物については、明治44年（1911）の発掘調査で得られたE6号墳（狐塚3号墳）の出土資料が知られているが、当時の事情により東京国立博物館、穂高神社、安曇野市ほか個人に分散保管されている。これら遺物については、発掘後に撮影された遺物集合写真（第28図）が手掛かりとなり、土器に

については三木弘による詳細な分析がある(三木2011)。図化されている須恵器は5点で、この他に写真に5点が掲載されている。三木の年代観を参考にして須恵器を概観すると、長脚2段透かしの高坏(第28図上段写真左下)と体部が球形の平瓶等から6世紀末～7世紀初頭の段階、フラスコ形長頸壺、長頸壺とかえりを持つ坏蓋(第28図中段写真左)等から7世紀中頃～後半の段階、把手付き大形の平瓶、高台盤から8世紀前半の段階が想定される。須恵器の他に武具として鉄鎌、直刀、鐙、鉄鉾、馬具では轡、装身具では勾玉、切子玉、管玉等の玉類、金環、銅釦がある。また、E7号墳(狐塚2号墳)の出土遺物には鉄鎌と金環があり、須恵器、直刀、鉄鎌、轡が本古墳と共通する副葬品となる。現在までに失われた遺物が多いことから単純な比較はできないが、E6号墳(狐塚3号墳)との比較では本古墳の築造時期は、E6号墳(狐塚3号墳)の初期埋葬段階より遅れること、最終時期は同一となること、副葬品の内容・量が劣ることが指摘できる。

4 須恵器坏蓋・坏にみる穂高古墳群の終焉期

穂高古墳群72基の築造・形成の始まりは6世紀後半からで、7世紀後半までは馬具、武具、装飾品が副葬され、8世紀前半に古墳群の終焉を迎える。この副葬品の構成から被葬者について「馬生産に関連した氏族」とする指摘がなされ(桐原1991)、立地が河川(沢)の流域、分岐の要所であることから「地域開発を担った集団氏族」という姿が浮かび上がっている。また、被葬者集団内の相互の関係性に関しては「墳丘規模と副葬品組成との間に明確な相関性が認められず均質性が高い」「比較的等質的な社会を基盤として成立していた可能性がある」等の分析がなされている(三木2011)。とは言え、各群内には築造当初より中核となる要素をもつ古墳があり、終末期には地域内を統括して祭祀を集約した痕跡も見えている。被葬者集団にかかわる政治・社会的な追究は、地域全体の集落遺跡の分析が必要であり、既に発掘調査を行った市内集落遺跡の報告と合わせて今後解明を進めたい。ここでは、本古墳の閉塞期となる3a群とした須恵器(第18図1～7)を中心に周辺地域の古墳の様相と併せて、穂高古墳群の終焉期の情勢について検討する。閉塞期にあたる須恵器については、G1号墳(上原古墳)の報告において、上原古墳出土須恵器と、穂高古墳群A群・B群から出土した須恵器を多く収蔵している有明山神社の須恵器を比較したところ、新しい須恵器の時期はどちらも8世紀初めまで下がること、上原古墳墳丘出土須恵器は新しい時期に入り、比較的短い時間幅があることが指摘されている(安曇野市教委2015)。まず、古墳出土須恵器について以下の点を整理しておく。

(1) 須恵器の用途区分と器種分類

古墳出土の土器の用途としては、副葬品、装飾品、祭葬儀礼に用いる容器・道具・儀器、供献容器がある。用途の識別には須恵器そのものの装飾性や機能性、時期によっては希少性、生産窯のほか墳丘・石室での空間分布、遺存状況、数量等が観点となる。副葬品となる土器は、死者が生前使用していた道具、あるいは威信財となるものであるから装飾性の強い須恵器や他地域からの搬入品、精製された土師器等が考えられる。副葬品は、玄室の遺体もしくは遺骨の近い位置に遺体の石室収納時に安置され、羨

道や前庭、周溝への配置はなかったとみられる。本古墳群ではF9号墳（二つ塚）出土の子持壺、B23号墳（祝塚）出土の土師器甕、6世紀代に帰属する須恵器が該当する。

装飾品として石室もしくは墳丘を彩る土器は、ある程度の法量と数量が必要で、容器としては特殊な造形を持つものと考えられる。穂高古墳群での出土例はない。

葬祭儀礼に用いられた複数の容器のうち、主に玄室に残された容器が供献容器として識別される。長頸・短頸壺、横瓶、平瓶、提瓶、蓋高坏、蓋环等であるが、数量は限定される。おそらくこれらの容器には水・塩・食物などが供物として入れられ、死者の近くに安置されたことが想像される。本古墳群で出土位置が玄室、閉塞石付近とした土器は供献容器となるが、葬祭（埋葬）儀礼は一定期間継続するので、遺体埋葬時の供献具収納とその後の葬祭儀礼に用いた収納とは供献に時間のずれが生じる。このずれを考慮して供献容器の検出状況を見極める必要がある。

葬祭儀礼だけに用いられる容器は、玄室以外の場所から出土する土器をもって葬祭時の容器と識別する。葬祭用として限定された器種・器形の容器は、まとまって羨道や前庭、周溝などの墳丘から廃棄・遺棄された状態で検出される。この状況は、G1号墳（上原古墳）のほか、瀬古墳群（明科東川手）、安塚・秋葉原古墳群（松本市）に見られる。葬祭儀礼は、埋葬・閉塞等の行為だけでなく、祭祀（＝祖先を祀る）として定期的に続けられた可能性が高いので、供献容器と同様に出土土器に時間・時期のずれがあり、石室出土土器に後続する時期となることが考えられる。

本古墳群出土土器で最も多く出土した器種である須恵器坏蓋と坏身について、用途を視点として葬祭儀礼の変化をまとめる。対象とする坏蓋、坏身の器種名称については、以下の特徴を有する須恵器を示している。

- | | |
|------|---|
| 坏蓋 A | 宝珠形つまみが付き内面にかえりをもつ蓋。主に口径12cm以下の坏 A に対応する。 |
| 坏 A | ヘラによる底部調整をする無台の坏身。底部が肥厚する個体がある。 |
| 坏蓋 B | つまみが付き、内面にかえりをもたない口縁端部を折り曲げた蓋。口径13cm以上の坏 A と坏 B に対応する。 |
| 坏 B | ヘラによる底部調整をする有台の坏身。逆台形の体部形態となる。この坏 B はヘラによる調整のみを原則とするが、秋葉原古墳土坑出土の坏 B の一部に中央糸切りを残す個体がある（松本市教委1983）。 |
| 坏蓋 H | 椀形の坏を伏せた形態に近い。坏 H の蓋になる。 |
| 坏 H | 丸底で蓋受け部をもち、受け部から口縁部にかけて立ち上がりをもつ坏身。 |

（2）対象とする坏が出土した古墳の概要

本古墳群において、出土遺物と出土位置が確認できる古墳は、G1号墳（上原古墳）、F9号墳（二つ塚）と本古墳の3古墳のみで、帰属が確実な須恵器がA6号墳（犬養塚）、B23号墳（祝塚）、E6号墳（狐塚3号墳）の3古墳から出土している。市内近隣では、前の髪古墳（堀金烏川）、瀬6・7・8号墳（明科東川手）、松本市内には安塚・秋葉原古墳群（新村）、南方古墳（里山辺）、中山古墳群などいくつかの事例がある。その中から抽出して補足したい（第27・29・30図）^{〔註2〕}。

F9号墳(二つ塚)は、墳丘径11.0m、石室長7.0m、最大幅1.5m、残存壁高1.8mのF群2番目の規模をもつ円墳である。本古墳は、國學院大學文学部考古学研究室の発掘調査と整理・分析によって、石室内外遺物の詳細な出土分布状況等が明らかとなった。対象となる8世紀前葉の須恵器は、閉塞石付近の東側壁寄りに複数の須恵器が重なり合う状態で検出された。この須恵器の中で、長頸蓋の幾つかの破片が玄室中央から奥壁にかけて散在していた状況もあるが、集中区遺物が一括して玄門に安置されていたとみることができる。また、坏蓋Bが4点と坏Aが1点、坏Bが3点出土している。坏蓋Bは、天井部高が2cm以下とやや浅く平坦な形状となり、口径は14cm前後である。坏Aはヘラ切りしナデ調整した底面がやや肥厚し丸底形状となる。口径は14cmと大きく、器高も4cm以上である。坏Bの3点は、「ハ」字に開く不安定な高台で口径13.5~14.5cm前後とやや小さい。この土器集中区南側の閉塞石を隔てた前庭(開口部)から、口径が13cmで肥厚した丸底底面の形状となる坏Aが出土している。この土器群のほかF9号墳では、玄室中央から土師器碗が3点と奥壁付近から坏Aが1点検出された。坏Aの口径は9.5cmと小形で、蓋として坏蓋Aが想定される。7世紀中頃の供献容器は、在地生産の精製土師器碗と須恵器坏蓋A(想定)と坏Aとなる。

G1号墳(上原古墳)は、石室が確認されていない単独墳のH1号墳(大塚様)を除くと、扇状地内で最も低い標高586mの扇状地扇尖に立地する大形古墳である。墳丘は14.5×13.8mの不正円形、石室長9.2m、最大幅1.5m、残存壁高1.75mの規模をもつ。昭和5年(1930)、平成11年(1999)、平成14~16年(2002~2004)の4次にわたり発掘調査が行われた。昭和5年の猿田文紀による調査では、石室内か

第9表 閉塞期の須恵器出土がある抽出古墳一覧表

古墳名 須恵器出土場所	閉塞段階の須恵器の器種 (坏Aは底部ヘラ調整) その他の須恵器・遺物等	閉塞段階の出土位置・状況 その他の遺物出土場所	備考
E13号墳(本址) 玄室	坏蓋B、坏B 平瓶、鉄瓶、直刀、馬具、骨	玄室内玄門付近東側に積み重なる 玄室中央及び奥	東海地方西部搬入品
F9号墳(二つ塚) 玄室	坏蓋B、坏A・B、碗、高坏、長頸蓋、壺 土師器碗、子持壺、フラスコ壺、武器、馬具、装身具他	玄室東側壁・閉塞石付近に積み重なる 玄室中央から奥付近	6C末~7C初からの 築造・埋葬
G1号墳 (上原古墳) 黄道 墳丘・前庭	坏蓋B、坏B、坏A(1930年出土) 坏蓋A・B、坏A・B、高坏、平瓶、長頸蓋、短頸蓋、壺 坏蓋H、平瓶、横瓶、武器、馬具、装身具	玄門付近、黄道から破片 墳丘根、前庭 石室内及び墳丘	美濃須南搬入品 装身具の年代より6C 末からの築造・埋葬
A6号墳(大塚様) 石室内か	坏B、(坏A) 平瓶、坏蓋H・坏H、武器、馬具、装身具	石室内か	6C後半からの築造・ 埋葬(明治20年調査)
B23号墳(祝塚) 古墳付近	坏A 壺、高坏、提瓶、土師器碗(馬具、装身具)	不明	6C後半からの築造・ 埋葬(大正10年調査)
前の塚古墳 玄室	坏蓋B、坏B、高坏、平瓶、長頸蓋 坏A、灰釉陶器(表埴)	玄門付近(黄道2.5mで開口部から約3m 地点に固まって出土)	昭和43年調査
瀬8号墳 周溝内	坏蓋A・B、坏A・B、平瓶、鉢、長頸蓋、壺 フラスコ壺、平瓶、長頸蓋、武器、装身具、馬具	周溝内 一部石室内	東海地方西部搬入品 多数
秋葉原1号墳 (松本市新村)	坏蓋B、坏A・B、長頸蓋、耳付短頸蓋、 坏蓋B、坏A・B、高坏 刀子、骨	黄道(開口部から立柱石)前庭部(周溝)、 周溝内土坑 玄室	安塚・秋葉原古墳群 に属す。 小野神社所蔵土器に 坏Hあり

ら須恵器、武具、馬具、装身具等の副葬品が数多く出土し、それぞれの検出位置の概要が報告されている(猿田1931・1933)。この記録から、須恵器が狭道に集中して散在していたことが確認できた。平成11年(1999)から穂高町教育委員会が実施した「古墳保存整備事業」による調査では、墳丘の東西裾部、前庭から遺物が検出された。狭道からは、坏蓋Bが4点、坏A・坏Bが各1点、不明1点の計7点が出土した。坏蓋Bはいずれも径15~17cmの範囲で、3点は天井部ドーム形でE13号墳出土坏蓋と同一形状であるが、1点は天井部高2cm程度の平坦な形状となる坏蓋である。坏Aは、回転ヘラ切りナデ調整の丸味のある肥厚底部形状で、口径は12.2cmである。坏Bは口径16.4cmで、重みの著しい器形となる。前庭からは、坏蓋Bが3点と坏Bが6点出土している。坏蓋Bは、口径が17cm前後と大きいのが、天井部高が2.7cm以下と比較的低い形状である。坏Bの6点は、法量が2種に分かれ、口径16cm以上で器高3cmと低い器形のもと口径15cm以下で器高が4cm前後のものがある。墳丘東裾からは、坏Bと坏Hが各1点出土している。坏Bは高台面より底面が低くなる不安定な器形で、口径16.4cmである。坏蓋Hは口径16cmと大きいのが、沈線・稜が不明瞭で判別が難しい須恵器である。墳丘西裾からは坏蓋Aが5点と坏Aが3点、坏蓋Bが5点出土している。坏蓋5点の内4点が「かえり部が突出しただけの形状」や「天井部が底面に接する扁平な形状」など重みの著しい粗雑なつくりの蓋であった。口径は10~14cmの範囲である。坏Aは口径13~14cmと中形の法量となり、底部はやや肥厚するが平坦形状である。坏蓋Bの5点のうち4点が天井部高の低い平坦形状となる。口径では、16cm前後の大形のもと14cm以下の小形の2種に分けられる。

狭道から出土した坏Aと坏蓋B・坏Bが埋葬時、もしくは閉塞時により近い段階の葬祭儀礼にかかわる容器とされ、墳丘西裾集石出土の坏蓋A・坏A、坏蓋Bと前庭と東裾出土の坏Bが祭祀にかかわる容器と判断した。さらに墳丘西裾の段階と東裾の段階に時期差がみられる。

A6号墳(犬養塚)は墳丘130m、石室長7.2m、幅1.45mの大形古墳である。出土遺物は有明山神社の宝物として保管された須恵器7点があるが、出土位置は不明である。対象となる坏Bが2点確認され、口径16.2cmと17.2cm器高3.8cmの大形坏で、E13号墳出土の坏と同一形状である。このほかに、A6号墳(犬養塚)では坏蓋Hと坏H、同時期の平瓶、時代の下る坏が報告されている。坏蓋Hの口径は14.1cm、天井部外面ヘラケズリで外面に1条の沈線を巡らしている。坏Hは、口径12.8cm、器高4.4cmで、受け部からの立ち上がりが短く内傾した器形、底部ヘラケズリ調整となる。6世紀後半に比定される資料であり、6世紀代の副葬・供献容器となる。坏Hについては、破片資料としてD1号墳(魏石鬼窟)においても出土がある。

B23号墳(祝塚)は墳丘13.8mの大形古墳で周辺古墳を含めた帰属資料とし10点の土器が報告されている。内訳は提瓶が4点、高坏が2点、坏Aが2点、精製土師器の甕が1点である。坏Aの2点は口径12cm、底部ヘラケズリ調整を施した、器壁の薄い整った作りである。確実に本古墳に帰属する一括資料という確証はないが、坏Aには、蓋坏Aが想定され供献容器となる。

前の髪古墳は、昭和38年(1963)に発掘調査されたが、調査内容を示す詳細な記録がなく不明な点が多い。石室は幅1.0m、長さ7.0m、高さ約1.5mで、開口部から2.5mまでは幅が狭い狭道が確認された。記録には「入り口から約3m入った地点に須恵器が固まった状態で発掘され、墳丘からも須恵器破片

が拾われているが、それ以外の遺物は水晶の原石だけであった」と記載されている（堀金村誌編纂委1991）。このことから、出土位置は玄門付近と判断される。蓋坏Bが1点と坏Bが4点あるほか平瓶、高坏、長頸壺が出土している。坏蓋Bは口径16.2cmでドーム形の天井となる器形、坏Bの3点は口径15cm前後、器高4～4.5cmで高台より底面が低くなる不安定な器形となり、E13号墳出土の須恵器と同一形状である。葬祭儀礼の供献器となる。

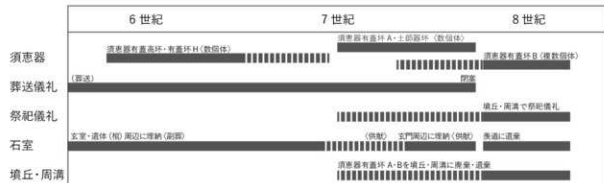
瀬古墳群は、8基の古墳が確認され、その内の4基についての報告、記録がある。1号墳（金山塚）は、直径20mの円墳で、直刀や刀子、轡と付属金具、須恵器の出土が知られているが詳細は不明である。6・7号墳は平成10・11年（1998・1999）、8号墳は平成17年（2005）にそれぞれ発掘調査が行われ、墳丘は大きく削平されていたものの石室の一部と周溝が検出された。3基の石室はいずれも最下段の角礫が部分的に残り、塵敷きで、棚石が残る箇所も検出されている。周溝、周溝内の土坑からは夥しい数の須恵器と鉄製品が検出された。6・7号墳については、遺物量が多く本稿では概要を整理しきれないため、8号墳を取り上げる。周溝内の須恵器は7世紀中頃～8世紀前半に比定されるものを主体とする。長頸壺、平瓶、甕、蓋坏など多様な器種に東海地方からの搬入品が含まれている。対象としては、坏蓋A・Bと坏A・Bがある。坏蓋Aは径11cm前後、坏Aは口径11cm前後のものを主体とするが15cmと大形の器形があり、底部ヘラケズリにより厚みを減じている丁寧な調整と粗雑なナデによる調整の2者がある。坏蓋Bも天井部がドーム形になる器形と水平に広がる器形など多様で径10～16cmまでの幅がある。坏Bは、口径15～17cmとなるが、器高が3.5～5.5cmと幅がある。高坏1点を除いて須恵器は全て周溝内から礫に混じって検出されている。後世の石室破壊にともなう遺物の散乱も考慮されるが、坏の破片が多いこと、多様な器種が散乱していることから、葬祭儀礼の須恵器の遺棄とみることができる。東周溝内からは坏蓋Aと坏Aがまとまって検出されている状況もあり、長期にわたり断続的な葬祭儀礼の痕跡とみることができる。ただ、平瓶など完存する須恵器や搬入品も数多くあり、ひとつの古墳の葬祭儀礼だけでは解釈できない問題も残り、7世紀後半～8世紀前半の大規模な祭祀とも位置付けられる。

秋葉原1号墳（松本市新村）は、開口部に周溝と封土外護の石積みを残した推定径120～150mの円墳である。石室は全長7.4mで玄室4.0m、羨道3.4m、幅1.05m、高さ0.8mの規模を有し古墳群内では大形である。基盤となる層を掘削して扁平川原石の小口積みで構築され、石室は側壁立柱石によって玄室と羨道に区分される。玄室からは骨と刀子1点以外の遺物はなく、出土した須恵器は羨道と前庭・開口部周溝である。検出状況に関しては「ほとんどが破片で、小単位で一括品として捉え得る状態ではなかった。」と報告している。土器は全て須恵器で坏Aが3点、坏蓋Bが11点、坏Bが9点のほか、長頸壺、短頸壺、平瓶などである。この一群とは別に、周溝に接した土坑内から坏Aが1点、坏蓋Bが6点、坏Bが7点、高坏、短頸壺が出土している。これら土坑出土須恵器については、前者の一群と時期差のある資料とする所見が得られている。各器種についての法量分析はしないが、秋葉原1号墳について須恵器の用途について検討する。本古墳が属する安塚・秋葉原古墳群は7世紀中頃から築造形成が始まり、武具・装身具を数多く副葬した安塚5号墳とこれに継続する8号墳がある。これらに続くのが秋葉原1号墳であり、出土須恵器から7世紀末～8世紀前半に古墳築造、葬祭儀礼が始まったとされる。大

形古墳にも関わらず副葬品が少ない要因は、この時期の葬祭儀礼、祭祀形態によるものと考えられる。羨道に散在した坏Aと坏蓋B・坏Bは、葬祭儀礼における容器の廃棄・遺棄であり、一定期間継続的に葬祭がおこなわれた痕跡とみられる。この時期を小形の坏蓋A・坏Aが減少する段階から坏蓋B・坏Bが法量分化する前の段階とみて、数回の葬祭が存在したと考えられる。更に底部に糸切りを残す調整が出現する坏Bを葬祭儀礼に容器として使った段階があったことがわかる。安塚・秋葉原古墳群で、石室に供献容器を安置せず葬祭・祭祀をした古墳は、秋葉原1・2号墳だけであることから、この時期に祭祀が特定の古墳に集約されたとみられる。

(3) 穂高古墳群の終焉期の祭祀

須恵器坏蓋・坏の型式変化の大枠は、穂高古墳群の出土須恵器で捉えた坏蓋H・坏H⇒坏蓋A・坏A⇒坏蓋B・坏Bへの変化が基本となり、法量分化と土器組成（器種の組み合わせとその割合）で過渡期を位置づけることとなる。須恵器は、時期によって生産地からの供給量が反映されているため、器種や量に地域差があり、7世紀後半からは地方須恵器窯の出現によって在地の消費量が飛躍的に増加している。供給量の少ない7世紀中頃までは副葬品に須恵器が少ないため、馬具・武具の副葬品の型式分類による年代観に追いつけないのが現状である。数少ない須恵器であるが、供献容器として6世紀後半からA6号墳（犬養塚）に坏蓋Hと坏Hがあり、これが本古墳群の初見となる。次の段階は、帰属に不確定さはあるがB23号墳（祝塚）に坏Aがあり、F9号墳（二つ塚）には、本古墳群で今まで出土例がなかった土師器碗とともに坏Aが供献容器となっている。坏蓋AはE6号墳（狐塚3号墳）にあり7世紀中葉から後半まで坏蓋Aと坏A、そして精製土師器碗が供献容器としてある。7世紀後半までは、須恵器が供献容器となっている。坏Aに加え坏蓋Bと坏Bが出現した段階を境に、供献容器であった坏蓋・坏は玄門付近、閉塞石付近にまもって安置されることになる。この時期になると供献容器は、死者との位置関係よりも古墳・石室空間が意識されるようになっていく。E13号墳（浜塚塚）とF9号墳（二つ塚）での供献容器の出土状態を見ると、数回の供献行為があって完存する須恵器が伏せられ、重なり合って最終安置されたように推測される。7世紀末～8世紀前葉の須恵器は、葬祭儀礼だけに用いられた証でもある。G1号墳（上原古墳）からは石室外で行われた祭祀の様相を追うことができる。坏蓋Aの形状が扁平・法量が大きく変化する7世紀後半から、石室外での葬祭儀礼に坏が用いられ、墳丘裾に遺棄される。この段階を、須恵器坏を供献以外に用いた葬祭・祭祀が始まる段階とする。更に



第26図 穂高古墳群出土土坏にみる葬祭儀礼の変化

坏蓋Aが消滅し坏蓋B・坏Bが主体となる時期には羨道や墳丘裾に祭祀用の坏が大規模に遺棄される段階となる。秋葉原1号墳では、周溝付近の土坑内への一括遺棄があることから、8世紀前半には須恵器坏の用途が石室内への供献容器から葬祭儀礼もしくは祭祀容器だけに用いられ、墳丘外で処理される段階になっていく。

安曇野市周辺ではG1号墳(上原古墳)と潮6・8号墳の須恵器検出状況から、墳丘周辺で継続的な祭祀が行われたことがわかる。器種は、坏蓋・坏に限らず高坏、甕、各種瓶と多種にわたり、多くの容器が復元され、祭祀行為がその場で完結したことがわかる。このことから、7世紀後半には支群を形成した中核となる古墳の氏族系列が少しずつ崩れはじめ、8世紀には限られた古墳での祭祀に集約されていったように見える。7世紀終末の個々の古墳では武具・馬具・装身具の副葬品はなく、供献容器に限られた須恵器の器種が玄室に収納されている。8世紀前半までには個々の葬祭儀礼・祭祀は特定の古墳へ集約され、古墳祭祀の終焉を迎えた。

祭祀が集約された古墳はどこであろうか。再び、古墳群築造の氏族を考えると「馬匹生産に関連した氏族」もしくは「地域開発を担った集団氏族」に由来する場所が有力のように思える。西山麓城の穂高古墳群では「猪鹿牧」に引き継がれるE・F群内の大形古墳E6号墳(狐塚3号墳)と沢の分岐付近に立地するG1号墳(上原古墳)、東山麓城では窯業生産・古代交通の要所がある潮古墳群であろう。なお、明科東川手の「潮(うしお)の地名の由来は「塩」であり、30年ほど前まで鹹水かんすいを源泉とする温泉が数か所にあったことも記しておく。

註

(註1)『南安曇郡誌』(旧)では「三郎次塚」とされる。

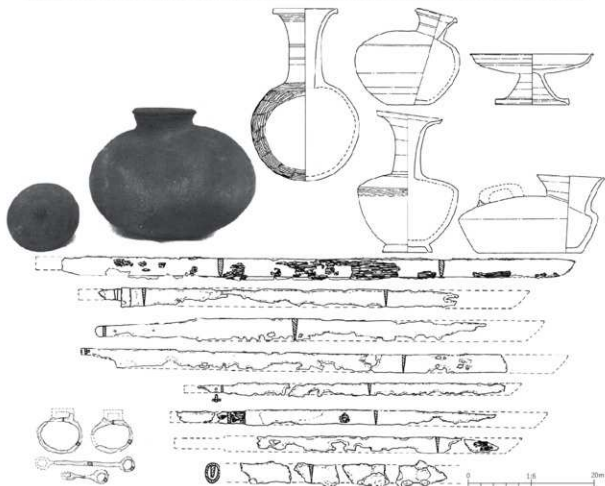
(註2)古墳出土土器の点数は、各古墳報告書に作図・掲載した個体を1としている。

F9号墳



第27図 F9号墳出土遺物(吉田ほか編2014、青木ほか編2019より転載)

E6号墳 (狐塚3号墳)



第28図 E6号墳出土遺物 (穂高町誌編纂委1991a、長野県南安曇郡1923より転載)

第7章 調査の総括

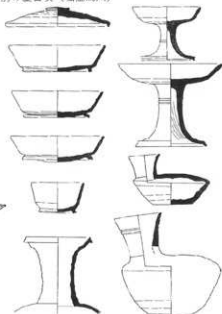
A6号墳（犬養塚）（穂高有明）



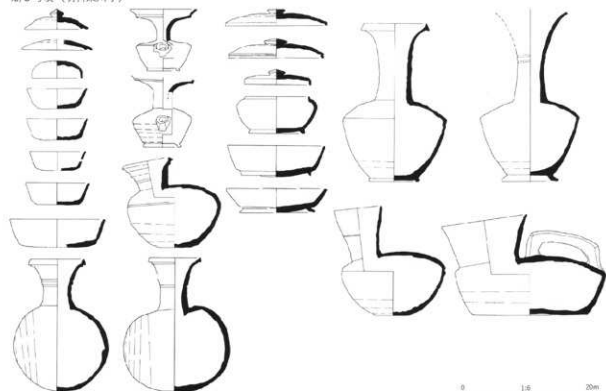
B23号墳（祝塚）（穂高有明）



前の髪古墳（堀金鳥川）

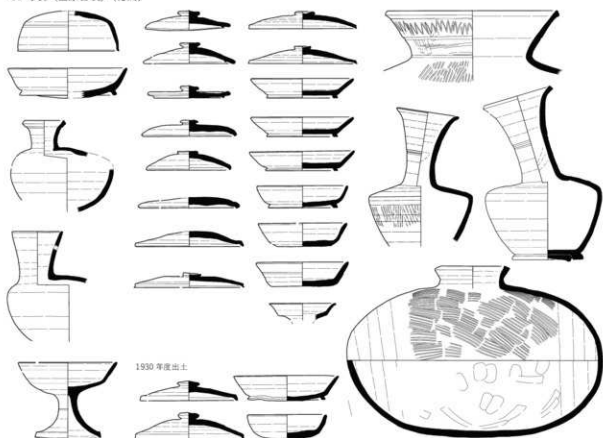


潮8号墳（明科東川手）

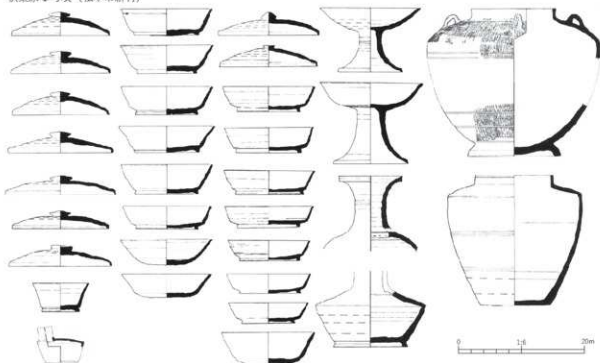


第29図 周辺古墳出土土器 1
 (A6号墳・B23号墳 (穂高町誌編纂委1991a)、前の髪古墳 (堀金村誌編纂委1991)、潮8号墳 (明科町教育委員会2005))

G1号墳（上原古墳）（穂高）



秋葉原1号墳（松本市新村）



第30図 周辺古墳出土土器 2

(G1号墳（安曇野市教委2015）、秋葉原1号墳（松本市教委1983）)



石室・石材検出状況（北から）



石室・石材検出状況（西から）



開口側 石室検出状況（南から）



奥壁側 石室検出状況（北から）



環・環蓋出土状況（北から）



環・環蓋出土状況（北西から）



直刀出土状況（南西から）



直刀・環出土状況（西から）

1 調査状況 1



坏・甕出土状況（北西から）



甕出土状況（西から）



直刀・坏出土状況（北西から）



金具出土状況（東から）



鉄鎧出土状況（南から）



鉄鎧出土状況（東から）



坏出土状況（北から）



平瓶出土状況（西から）

2 調査状況 2



石室調査状況（北から）



石室開口部調査状況（北から）



石室全景（南から）



石室調査状況（南から）



石室全景（北から）



石室西壁（北東から）



石室西壁（東から）

3 調査状況 3



石室東壁（西から）



石室東壁（北西から）



西壁 石積み（東から）



西壁 石積み（東から）



東壁 石積み（西から）



奥壁（南から）



石室検出調査状況（北西から）



石室掘り下げ調査状況（西から）

4 調査状況 4



調査前段丘崖（南から）（矢印はE13号墳の位置）



調査前段丘崖（南西から）



調査前古墳入口部・段丘崖（東から）



造成による段丘掘削状況（南西から）



ほ場整備後（北から）



ほ場整備後（北西から）（令和2年5月1日撮影）

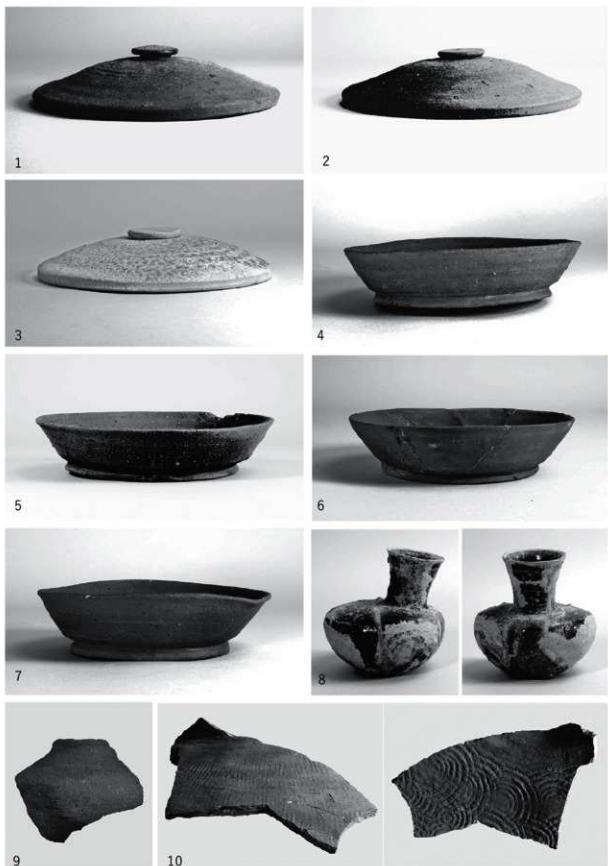


畔に残る石室石材（西から）（令和2年5月1日撮影）

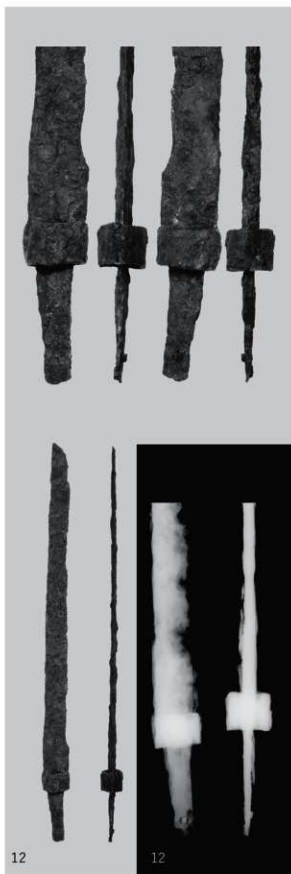


石室石材（北から）（令和2年5月1日撮影）

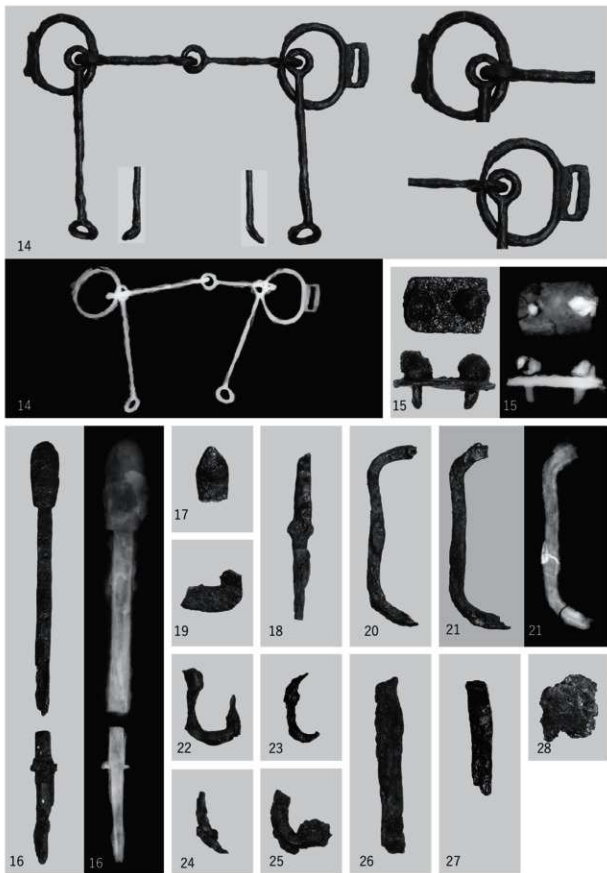
5 調査状況 5



6 出土遺物 1



7 出土遺物 2



8 出土遺物 3

引用・参考文献

- 青木敬、朝倉一貴編 2019 「長野県安曇野市穂高古墳群2016・2017年度F9号墳発掘調査報告書」國學院大學
文学部考古学実習報告第55集 國學院大學文学部考古学研究室
- 愛知県史編さん委員会 2015 「愛知県史 別編 窓業1 古代 鎧投系」愛知県
- 明科町史編纂会編 1984 「明科町史」上巻 明科町史刊行会
- 明科町教育委員会 1991 「ほうろく屋敷遺跡—川西地区県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—」明科
町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1995 「上生野遺跡—生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—」明科町
の埋蔵文化財第5集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 1998 「桜坂古窯址—主要地方道穂高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—」明科町の
埋蔵文化財第5集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 「潮神明宮前遺跡—明科町総合福祉センター建設に伴う緊急発掘調査報告書—」明科
町の埋蔵文化財第8集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2002 「栄町遺跡—「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査—」明科町の
埋蔵文化財第6集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2005 「潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—」明科町の埋蔵
文化財第13集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2013 「明科遺跡群栄町遺跡（第3次）」[平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書]
安曇野市の埋蔵文化財第6集 安曇野市教育委員会 pp.30-116
- 安曇野市教育委員会 2014 「明科遺跡群栄町遺跡（第4次）」[平成24年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書]
安曇野市の埋蔵文化財第7集 安曇野市教育委員会 pp.15-58
- 安曇野市教育委員会 2015 「穂高古墳群G1号墳（上原古墳）第3次・第4次発掘調査」[平成25年度安曇野
市埋蔵文化財発掘調査報告書]安曇野市の埋蔵文化財第8集 安曇野市教育委員会 pp.19-78
- 安曇野市教育委員会 2016 「芝宮南遺跡—穂高南小学校プール改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」
安曇野市の埋蔵文化財第10集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2018 「穂高神社境内遺跡1—新穂高支所建設事業に伴う第1次発掘調査報告書—」安曇
野市の埋蔵文化財第14集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2019 「潮神明宮前遺跡3—安曇野市消防団第7分団第1部詰所新築工事に伴う第3次発
掘調査報告書—」安曇野市の埋蔵文化財第18集 安曇野市教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2020 「三枚橋遺跡7—店舗建設に伴う第7次発掘調査報告書—」安曇野市の埋蔵文化財
第21集 安曇野市教育委員会
- 池田町誌編纂委員会 1992 「池田町誌」歴史編Ⅰ（原始～近世）池田町
- 池田町遺跡詳細分布調査団 1994 「池田町の遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—」池田町教育委員会
- 岩崎卓也、松尾昌彦、松村公仁 1983 「有明古墳群の再調査」[信濃] 35-11 信濃史学会 pp.32-60
- 桐原健 1991 「第2章第3節 古墳時代」[穂高町誌] 穂高町誌刊行会 pp.57-99
- 桐原健 1992 「信濃に観る横穴式石室墳最終末の姿相」[長野県考古学会誌] 第67号 長野県考古学会
pp.39-51
- 桐原健 2014 「附編 安曇郡に観る古墳と寺院」[長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書] 國學
院大學文学部考古学実習報告第50集 pp.（1）-（7）
- 小山奈津美 2020 「信濃松本平南部における横穴式石室」[横穴式石室の研究] 同成社 pp.181-193
- 坂本美夫 1985 「馬具」考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社

- 猿田文紀 1931 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』2-5・6 信濃考古学会 pp.168-171
- 猿田文紀 1933 「南安曇郡穂高町上原区古墳発掘に就て」『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第14輯 長野県・長野県教育委員会（所収 1974 『長野県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4巻 長野県文化財保護協会 pp.67-80）
- 下中邦彦編 1979 『長野県の地名』日本歴史地名大系第20巻 平凡社
- 高橋透 2015 「6～7世紀のシナノにおける東海産須恵器の流通」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ—大室谷支群ムジナゴロ単位支群の調査—』明治大学文学部考古学研究室 pp.1-26
- 田淵行男 1976 『安曇野』朝日新聞社
- 豊科町誌編纂委員会 1995 『豊科町誌』歴史編・民俗編・水利編 豊科町誌刊行会
- 豊科町教育委員会 1987 『葛蒲平葛蒲平窪跡群—77kV 安曇野作業所送電線に係る埋蔵文化財報告書—』中部電力株式会社、豊科町教育委員会
- 豊科町教育委員会 1992 『古野町館跡遺跡—県営は場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』豊科町教育委員会
- 豊科町東山道跡調査会 1999 『筑摩東山—上ノ山・葛蒲平窪跡群発掘調査報告—』豊科町教育委員会
- 直井雅尚 1994 「松本市安塚・秋葉原古墳群の再検討」『中部高地の考古学Ⅳ』長野県考古学会 pp.277-305
- 中島豊明 1976 「穂高町塚原F1号墳調査概要」『長野県考古学会誌』25 長野県考古学会 pp.55-57
- 長野県南安曇郡 1923 『南安曇郡誌』南安曇郡教育会
- 中村新之介 2015 「古墳時代北信における鉄鏝—大室古墳群を中心に—」『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅳ—大室谷支群ムジナゴロ単位支群の調査—』明治大学文学部考古学研究室 pp.189-216
- 西山克己 2015 「シナノの初期「牧」を考える」『長野県考古学会誌』151 長野県考古学会 pp.32-57
- 深澤太郎編 2017 『長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第54集 國學院大學文学部考古学研究室
- 穂高町誌編纂委員会 1991a 『穂高町誌』歴史編上・民俗編 穂高町誌刊行会
- 穂高町誌編纂委員会 1991b 『穂高町誌』自然編 穂高町誌刊行会
- 穂高町教育委員会 1970 『穂高町の古墳—穂高町古墳調査報告書—』穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 1987 『矢原遺跡群（馬場街道遺跡）—県道柏矢町～田沢線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』長野県豊科建設事務所、穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 2001a 『穂高町他谷遺跡—県営中山間総合整備事業あづみ野地区に伴う緊急発掘調査報告書—』穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会 2001b 『穂高町一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡、穂高水系による開発沢、上原古墳—担い手育成基盤整備事業穂高西部地区に伴う発掘調査報告書—』穂高町教育委員会
- 穂高町、穂高町教育委員会 1989 『穂高町古墳特別展図録 穂高町の古墳群とその人々』穂高町、穂高町教育委員会
- 堀金村誌編纂委員会 1991 『堀金村誌』上巻（自然・歴史） 堀金村誌刊行会
- 堀金村教育委員会 1988 『神沢遺跡、田多井古城下遺跡、そり表遺跡』堀金村の埋蔵文化財第1集 堀金村教育委員会
- 堀金村教育委員会 2005 『堀金小学校付近遺跡—小学校の下に埋もれていた平安時代のムラー—』堀金村の埋蔵文化財第2集 堀金村教育委員会
- 町田洋 1979 「信濃川上流と壱川の自然と歴史」『松本砂防工事事務所のあゆみ—』建設省北陸地方建設局松本砂防工事事務所 pp.1-77

- 松本市教育委員会 1979 『松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書』長野県中信土地改良事務所、松本市教育委員会
- 松本市教育委員会 1983 『松本市新村秋葉原遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告 No.26 長野県中信土地改良事務所、松本市教育委員会
- 松本市教育委員会 1990 『松本市大塚古墳・南方古墳・南方遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財報告 No.74 松本市教育委員会
- 三木弘 1991 『有明古墳群の再検討（1）—狐塚3号墳の位置付けをめぐる—』『信濃』43-12 信濃史学会 pp.14-30
- 三木弘 2006 『有明古墳群の再検討（2）—魏磯鬼窟古墳の再考を通じて—』『長野県考古学会誌』118 長野県考古学会 pp.179-193
- 三木弘 2011 『第IV章第2・3節 安曇氏と王権』『古墳社会の地域経営』学生社 pp.317-357
- 三木弘、寺島俊郎、西山克己 1987 『長野県南安曇郡穂高町所在魏磯鬼窟古墳について』『信濃』39-5 信濃史学会 pp.59-83
- 三郷村誌編纂委員会 2006 『三郷村誌Ⅱ』第2巻歴史編上 三郷村誌刊行会
- 水野敏典 2013 『金属製品の型式学的研究 ⑤鉄器』『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社 pp.63-71
- 南安曇郡誌改訂編纂会 1968 『南安曇郡誌』第2巻上 南安曇郡誌改訂編纂会
- 吉田恵二、中村耕作編 2010 『長野県安曇野市穂高古墳群2009年度測量調査・現状確認調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第44集 國學院大學文学部考古学研究室
- 吉田恵二、中村耕作編 2011 『長野県安曇野市穂高古墳群2010年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第45集 國學院大學文学部考古学研究室
- 吉田恵二、中村耕作編 2012 『長野県安曇野市穂高古墳群2011年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第46集 國學院大學文学部考古学研究室
- 吉田恵二、中村耕作、深澤太郎編 2013 『長野県安曇野市穂高古墳群2012年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第48集 國學院大學文学部考古学研究室
- 吉田恵二、中村耕作、深澤太郎編 2014 『長野県安曇野市穂高古墳群2013年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第50集 國學院大學文学部考古学研究室
- 吉田恵二、深澤太郎、朝倉一貴編 2016 『長野県安曇野市穂高古墳群2014年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第52集 國學院大學文学部考古学研究室
- 渡辺博人 2001 『七・八世紀における美濃須賀と信濃』『信濃』53-11 信濃史学会 pp.35-60

調査報告書抄録

ふりがな	ほたかこふんぐん E13ごうふん (はまばづか) 1
書名	穂高古墳群 E13号墳 (浜場塚) 1
副書名	ほ場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第23集
編著者名	白居直之、土屋和章、山下泰永、中谷高志
編集機関	安曇野市教育委員会
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL.0263-71-2000
発行年月日	西暦2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
穂高古墳群 E13号墳 (浜場塚) (第1次)	長野県安曇野市 穂高牧317番2外4筆	20220	2-E13	36° 19' 33"	137° 50' 50"	19910110 ～ 19910203	500㎡	ほ場整備 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
穂高古墳群 E13号墳 (浜場塚)	古墳	古墳時代	直径約12mの円墳。 無袖の横穴式石室	須恵器、金属製品(直刀、 鉄鏃、轡、留金具ほか)	烏川扇状地北側に位置する E群で標高の最も低い場所 に立地する円墳。石室から、 須恵器10点、直刀3点、轡 1点等が出土。
要約	ほ場整備事業に際し、穂高古墳群 E12・13号墳を調査した。試掘の結果、E12号墳は古墳でないことが判明した。E13号墳は、推定径約12mの円墳で、全長8.6m 最大幅1.8mの横穴式石室を有することがわかった。石室内からは、7世紀後半～8世紀前半の須恵器10点のほか、7世紀中頃～後半の武器となる直刀、鉄鏃と馬具となる轡、留金具、絞具等が出土した。8世紀前葉の須恵器の検出状況から古墳閉塞期の様相を解明する資料を得た。				

安曇野市の埋蔵文化財第23集

穂高古墳群E13号墳（浜場塚）1

は場整備事業に伴う第1次発掘調査報告書

発行 令和3年（2021）3月31日

安曇野市教育委員会

〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地

電話0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社

